桜咲く春とともに卒業、入学、退職、新採用、異動と慌ただしいシーズンを迎えます。
今年、山口大学では、52人の職員が去られることとなりました。
今回は特集テーマを「退職者は語る“こんな山口大学は×××だ！”」とし、山口大学を去られる退職者の方に、大学に対する辛口のご意見を寄せていただきました。

最後の職場と想い出

石井　繁雄
総務部人事課　課長補佐
（安全衛生対策室長）

最後の職場（何をやったらいいの）

私の最後の職場は、国立大学法人になって２年目に設置（平成17年４月１日設置）された安全衛生対策室ですが、山口大学学則上には存在していない組織です。

法人化後、安全衛生については人事院規則(10-４職員の保険及び安全保持)から、労働安全衛生法等の適用受けることとなりました。

私が配置された平成17年４月には、既に安全衛生に係る中期目標中期計画に係る16年度計画は実施済みであり、17年度計画については計画済みの状態でした。今日から、ここから始めなければなりません。取りあえず17年度計画の中から具体的に「何を」「誰が」「いつまでに」という作業表を作成しました。

毎月１回開催する労働安全衛生連絡会議で各事項について、進捗状況・問題点・解決策を検討しながら17年度計画の遂行に向けてただひたすら走りました。

吉田事業場の専任衛生管理者が実施する毎週１回の職場巡視に毎回同行しました。毎週１回ですが、吉田事業場は複数の学部・大学院研究科・機構と事務局等があり１部署あたり年間２回の巡視が精一杯です。最初の頃は改善して欲しいところのみを当該学部等に連絡していましたが、最近では良く管理されている場所についても連絡するようにしています。良く管理されている場所についてはWebページ（学内限定）にも掲載していますので、参考にしていただければ幸いです。

５S励行で安全安心

「安全管理」、「衛生管理」はあまり気にしない方の方が多いと思います。私自身もこの仕事をするまでは気にも留めていませんでした。巡視に同行して初めて大学には危険が沢山潜んでいることが認識できました。その危険も巡視を重ねるごとに皆さんの安全管理への認識が深まり、事故防止につながっていると感じられるようになりました。

職場で実施しなければならない健康診断の種類の多さにも驚きました。17年度は過去の踏襲で実施しましたが、18年度からは保健管理センターの協力を得ながら、日程・実施の方法等を改善し、事務効率の向上と受診率の向上に努力をしました。

最近では「過重労働による健康障害の防止」が叫ばれています。労働基準法・労働安全衛生法が適用されるようになり、これに対応する業務が公務員時代と比べると増大しています。国立大学法人に変わり、どこの部署も慣れない仕事と増えた業務で大変な時期だと思います。仕事は楽しんで、前向きに、課題を発見し解決しながら進めるのが理想です。

安全衛生の基本は５Ｓです。仕

事の基本もこれに通じるところがあります。「整理（seiri）」、「整頓（seiton）」、「清潔（seiketu）」、「清掃（seisou）」、「習慣化（shukanka）」これを実施することによって仕事の能率はアップするはずです。

私の「もったいない」は時間です。

先ほど申しました「過重労働による健康障害の防止」も大切なことです。

言うまでもありませんが、多大な業務を処理するために優先順位を付けて処理することが大事です。さらに合理的なその処理方法を素早く見つけて仕事に取りかかることも大切です。勤務時間内に処理できるよう、仕事に対する処理計画を早めに立てることが必要です。勤務時間内に処理しようとする気持ちがもっと大切です。

１日24時間は誰にでも平等に与えられた時間ですが、残念ながら一生の時間は個人によって違います。せめて平等な今日１日24時間の中で所定労働時間以外の時間は、自分のためにも使いたいものです。自分の時間をもてるようううまく仕事の配分を考えることが大切です。

先ほど申しましたが、仕事は楽しんで、前向きに、課題を発見し解決しながら進めるのが理想です。「過重労働による健康障害の防止」に心掛けましょう。

想い出

思い起こせば私が就職した当時、事務局は今の山口市民会館の場所でした。近くに「亀山ラーメン」店があり、一杯30円で食べていました。また、勤務時間終了後は近くの商店街の「大萬」という赤提灯で千円札１枚を握りしめ、一本10円の焼き鳥でジョッキのアワをすくって多めに注ぐ良心的な親父さん（？）の生ビールを飲んだものです。

その後、山口大学は統合で平川地区へ移転しました。体育館、陸上競技場、サッカー場、プール等大学ですから、体育施設は他の企業と比べて十分すぎるくらい充実しています。昼休み時間、勤務時間終了後、今では考えられないくらい運動をしていました。世の中ゆとりがあったんだと思います（お金じゃなくて時間が）。車を持っている者もそんなに多くない時代でした。運動した後の一杯は格別でした。

ゆとりのあった時代を経て、体力的にも、仕事的にもきつい時代を迎えます。まず、宇部地区への通勤に始まり、次は徳山工業高等専門学校、少し山口勤務、また宇部地区勤務で最後は山口勤務でした。朝の通勤時はいつもの場所ですれ違う車に出会わないと何となく気持ちが落ち着きませんでした。２度目の医学部勤務の時、帰路有料道路のおじさんに「おはようございます。」と言われ「あれ？」と思いました。時計を見れば午前３時過ぎです。帰宅して一風呂浴びてまた出勤です。こんな日もありました。（遊びじゃありません。仕事です！）

職場ではいい人との出会いばかりでした。もちろん中には反面教師の人もいましたが今では懐かしい想い出です。職場の出会いが縁で、その後何年も付合い（当時の同窓会）が続いているものもあります。うれしいことです。

山口大学に勤務して40年２ヶ月でした。色々な職場で色々な人と巡り会い、楽しい職場人生を送らせていただきました。

ありがとうございました。

a happy mood「苦楽を共にした仲間」
（医・総務課庶務係　平10～11年度）
（筆者：前列左から２番目）

山口大学に期待すること

上田　満
大学院理工学研究科
システム設計工学系専攻　助教授

美しい大学造り

私が山口大学に着任したのは約40年前です。40年前の山口大学の各校舎はまだ木造で、学生時代の文理学部第18番教室（500人程度収容）は有名なぼろぼろの木造校舎でした。工学部も鶏舎風の建物が長屋風に並んでいました。当然キャンパス内は、あちらこちらに赤土が出て雨が降るとぬかるみとなっていたのを思い出します。それに比べて近年は、学内も整備され赤土が出たところは、グラウンド以外では見かけられません。国立の大学が整備されたとはいえ、私立の大学に比べればまだ十分とは言えないようです。出張などで私立の大学を訪問すると高級ホテル並みの整備がされ、山口大学は見劣りする次第です。工学部では学内クリーン作戦と称して、年に一度キャンパス内のごみ拾いを学生が行っています。しかしながら、国立の大学はただ、だだっ広いだけで雑然としているのが現状だと思います。もっと環境面に配慮した整備を行って欲しいと思います。

学生・助手・助教授を使い捨てにしない

最近小・中・高等学校にて、いじめが発生し社会問題化しています。果たして、大学ではそのようなことはないのでしょうか。大学生間ではあまり聞いたことはありませんが、教員と学生間、教員同士間では、如何でしょうか。ないとはいえない状況ではありませんか。学生は、20歳前後の良い大人ですから、我慢しているところもあるかと思います。あまり成績のよくない学生がゼミに配属されたら、その学生には声をかけない、指導しないというようなことがあるように思います。成績の悪い学生ほど丁寧な指導が必要ではありませんか。また、教授は助手・助教授を採用する場合には、そのものの命を預かるつもりで面倒をみることを心がけていただきたい。教授のわがままから、指導・待遇面について無視された助教授・助手がいませんでしょうか。学生・教員は皆人格のある一個人であり尊重すべきです。

学生には厳しくあれ

私が大学に進学した頃は、大学への進学率が10％程度であったと記憶しています。それが最近では、少子化から進学率が大幅にアップし、成績の悪い学生、人間形成の面でも未熟な学生が大学に進学しています。そのような学生は、受験に苦労していないせいか、勉学に対する甘えがあります。あるとき、学生が“出席が５～６回ですが、単位を出していただけますか”などと言ってきたことがあります。この学生を大声で怒鳴りつけました。学生曰く、“こんなにしかられたのは人生で初めてです、親にもこんなに叱られたことはありません”と。団塊の世代の親であれば、こんな教育はしていなかったと思います。これが現実です。したがって、たまには学生をきつく叱るのもあっていいと思います。

おわりに

山口大学は、環境面・人的（学生、教員の両者）面でも美しい大学であって欲しいと思います。

大学の使命とは何だろう

浮田　正夫
大学院理工学研究科
環境共生系専攻　教授

山口大学に奉職して38年、最後の３、４年を除いて、ほとんどの期間、決して十分ではないものの、それなりに安定した研究生活を送れたと感謝しています。しかし徐々に基礎予算が少なくなり、最後の２年間は大変苦しい赤字状態でありました。昨今、お金儲けにつながらない研究課題には、急速に研究費が確保しにくい状況にあることを体感しております。大学の使命は、教育・研究・社会貢献の３つであると言われています。おそらく山口大学に限らないと思いますが、最近の大学を取り巻く状況は大変問題があると思います。

教育面では勉強したくない人に、無理やり勉強させるために大きなエネルギーを費やしていますが、その割にはさほど実効が上がっているように思えません。もっと、大きな意味で、なぜ勉強が必要なのかを理解させ、自分から勉強したいと思わせる方法を考えるべきではないでしょうか。教育の証拠作りも、後ろ向きの仕事で、貴重な時間を消費しています。教育の充実度・満足度を総合的に表現できる評価法を考える必要があるでしょう。

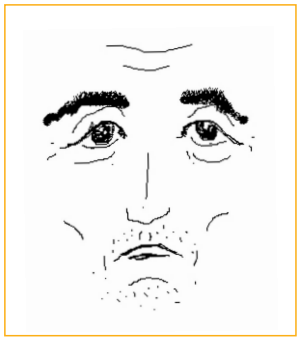
研究面では、大学は本来、民間では取り組めないような研究や、息の長い基礎研究に力を入れる所だと思いますが、最近の数年間は大学もひどい状況に置かれています。若い優秀な人材がつまらない雑用に追われ、余裕がなく疲れていることが一番大きな問題でしょう。いい研究をしていれば、社会が放っておく訳がありませんが、こんな状況ではいい仕事をする暇がありません。研究費を稼ぐために、大学が民間企業の出張研究室のような便利屋になる危険性を感じます。

社会的には長期的な視野から大学は本来、社会の行方を導けるような役割を期待されています。これだけ社会が将来を見定めかねている時代にあって、人間の生き方や価値観を考える人文系の学問、社会経済の仕組みを考える社会系の学問に期待されるところは大変大きいと思いますが、実利的な医学系・工学系などに比較すると元気がないのも気になるところです。

厳しい現実を前に、こんな理想ばかり言っても仕方がないとのご批判も多いと思います。いずれにせよ世界の価値観を反映して、このような状況があるわけで、これが変わらなければどうしようもありません。なお定年後の方針は決まっていませんが、アジアの一角から世界の価値観をより健全にするような仕事をしていければと思うこのごろです。

椹野川河口干潟の耕耘作業に参加して
（筆者：左端）

大学の不易と流行



熊谷　信順
教育学部
学校教育講座　教授

右往左往

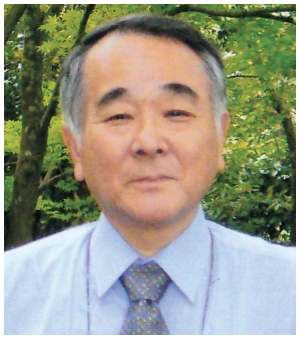
私は、「真理の探究」「学問の府」などの言葉がまだ素朴に信じられていた時代に学生生活を過ごしました。その最後の頃は大学紛争を契機に大学のあり方が問われていたときでもありました。良くも悪くも私が抱く大学のイメージと期待はその頃に作られております。大学から離れていた私が山口大学に職を得たのはそれから10年経っていました。紛争時代に比べて大学全体の雰囲気はまことに柔和でありました。そのつけが回ってきたのでしょうか。気が付いたときには全国で大学の生き残り競争が激化していました。学生の多様なニーズに応える、社会に対する説明責任、経営的視点と競争原理の導入などの言葉を耳にするようになりました。

学問体系を枠組みとする伝統的な学部や学科の名称は４文字や６文字あるいはカタカナの名称に取って代わられてきました。戦略的に〇〇センターや△△機構などの組織を競って設置し、そこへ人を手当するために学部は定員を拠出しました。追い打ちをかけるように総人件費削減です。その結果既存の学部はやせ細り、これまでの教育組織を維持できないというお粗末な動機で大学・学部改組が画策されるようになってきました。山口大学でも、教育学部は厳しい制約条件の下でひねり出した改組案をしかるべきところに持っていったことがありました。すると、担当者から「自分たちの身を守るために改組するのではないでしょうね。」という誠にごもっともなコメントをいただきました。見苦しい右往左往でした。

大学の不易

私は不易流行という言葉が気に入っています。マスコミに取り上げられて悦にいるような大学作りではなく、時代の変化の本質を見据えた対応が必要です。そのためには大学としての不易を明確にし、これに裏打ちされた流行を考えることが必要でしょう。これを怠ると、大学としての品格を欠くことになると思います。山口大学は大学の不易と流行をどのように議論し共有してきたのでしょう。だんだんと教育や研究以外のところでこれまでにない多くの時間とエネルギーを注がなければならなくなってきています。そのような努力をすることが明るい希望につながっているのだという実感を伴うのなら、どのような煩雑さや忙しさも厭いません。しかし、しばしば「何のためにこんなことを・・・」と思えるような場合も少なくありません。そのようなものは意義が十分に説明されていないか本質的に間違っているかのどちらかであると思います。

思い出と期待



杉原　美一
学術研究担当副学長
（大学院理工学研究科　環境共生系専攻　教授）

退職に当たって、YU Information 82号（３月号）の執筆依頼を受けました。依頼された題について私は到底執筆でませんので、以下に自分自身の思い出や当時抱いた気持ちと山口大学への期待を記させていただきます。

個性の尊重

私は、高等学校時代にはクラブ活動に明け暮れ、３年次にインター杯出場（初出場）できる等、部としての成果をおさめることができました。しかしながら、主将を務めておりましたので、強いチーム作りに苦労し勝つ喜びとともに辛い思いを抱いたことがしばしばありました。日々の練習が厳しいばかりでなく、自分自身の受験も間近（最終試合11月23日）ですし、受験のため退部する後輩もいたからです。クラブ活動を含め、受験生の高校までの生活の多様性を思いつつ、山口大学のAO入試導入に積極的に賛成したのは、この思い出に拠るものです。本学を目指しておられる高校生も、いろいろな状況の中で受験されていることと思います。今後とも、活力ある人材が入学できるように、本学の一般選抜・推薦入試・AO入試等、選抜方法の充実と実質化が進むことを期待しています。

活力ある人材の育成

山口大学の学生・院生は活力に富んで素晴らしいと常々感じています。しかしながら、長い人生において紆余曲折は付き物です。学生・院生に、大学での生活を積極的に送ることを期待するとともに、その最後となる研究室生活が実りあるものであり、前向きの姿勢で社会に旅立てるよう祈ります。

私が４年次から所属した研究室の先生は、私が大学院修士課程修了後、約３～４年過ぎて米国に移られました。私にとって４年次から修士課程までの短い期間でしたが、月月火水木金金ともいえる激しい研究室での経験が後の教育研究の支えになっています。先生がしばしば欧米に出張され、帰国後、欧米化学界の状況をお話くださったこと、また、リヨン、ロンドン、アレクサンドリアで育ち英語に熟達していた先生が、論文を書く折に真剣になって辞書を捲っておられたことを今でも鮮明に記憶しています。研究者は研究テーマの開拓に向けて積極的に努力すべきこと、また、一方で真摯かつ謙虚な勉学の姿勢を維持しなければならないことをこの時代に学びました。

学生・院生が、教えていただいた先生方の姿勢を見て育つのは、いつの時代でも変わりはないと考えています。

教育研究体制の実質化

最後に、本学における教育研究に係る総合的な取り組みが、国際社会から地域社会までの状況と本学の力量の綿密な分析等に基づいて創られること、構成員の協働により継続性をもって実施されること、それによって、今後とも本学から活力に満ちた人材が育つことを願って止みません。

“感謝” 山口大学教室勤務を終えるにあたり

田中　敦子
大学院医学系研究科
消化器病態内科学　事務主任

「団塊の世代退職」・「2007年問題」と耳にするようになった昨年４月に再雇用のお話を教授よりいただきましたが、その意思のない旨お伝えして悔いの無い最後の年を締めくくろうと思いました。でも８月31日に開催された退職者生涯生活設計セミナーを受講するまでは特に思うこともなかったですが、講義を受けてからは現実を再認識しました。

思い起こせば東京オリンピックの翌年、昭和40年５月15日に山口大学に採用されました。山口線・宇部線と乗り継ぎ、宇部にある医学部へ参りました。人事係長に案内されたのが内科学第一講座の研究室でした。それ以来42年もの間、移動の希望も出さず勤務し続けたのは教室の皆様の暖かいご理解とご支援があったからこそと感謝の気持ちで一杯です。

初めての仕事

教室勤務事務職員の立場上色々な事を経験しました。最初の仕事は、先輩について図書館で書籍を探し、研究室の暗室でコピーする作業です。そのうち動物実験も手伝うようになりました。犬舎で患者様の残飯を頂き餌やり、水道水のホースで床掃除、ラットの胆管にチューブを挿入して胆汁酸採取。当時は課せられた仕事を同年代の方と共に実験の補助ができる喜びを感じておりました。

教室の事務関係の仕事

昭和47年頃より、自分が年長となり教室の事務全般をするようになりました。その頃、結婚もしまして、家族の理解と協力を得ることができたお陰で、職場での仕事に励むことができました。通常の業務は流れに合わせて行えばよいのですが、教授が国内の学会会長を引き受けられた際、近年は学会専用の方にお願いできますが、以前は大変な仕事でした。感謝状を作成するのに毛筆で書いていただけるお家へお願いに行き、感謝状を丸筒に納め、医局の先生方で手分けして、新幹線で東京の学会会場国立教育会館へ運んだ思い出があります。

一番の大仕事は経理の管理でした。銀行での口座開設に始まり、学会会場での会費をとりまとめて、東京、福岡、下関と近くの銀行窓口へ運びました。余りにも大金ですので先生が御一緒して下さることもありました。昨今は税金の絡みも派生して、業務は大変になっています。

2004年DDW-Japan（日本消化器関連学会週間）が福岡市の国際会議場で開催された際、自分たちの業務が終了し、重い鞄を提げ博多駅へ向かう前に、学会の東西対抗野球大会がヤフードームで開催されていたのを、応援に立ち寄り観戦できた楽しい想い出もあります。

今後の教室へ希望

医学部・附属病院も限られた予算配分のなかでは、何も出来ない状態です。現状を見極めて、外部資金を大量に獲得するための最大限の努力を教室一丸となってしていただきたいと思います。研究者であり、患者様に信頼される医療人として国内・国外で多いにご活躍され、誇れる山口大学のご発展をお祈りします。

本当に長きにわたり、ご迷惑をも顧みず、生涯のすばらしい職場として働く喜びを与えて頂いた事に深く感謝申し上げます。

福岡市での2004年、DDW-Japanの学会本部で（筆者：左）

退職にあたって

田中　晉
人文学部　言語文化学科　教授

顧みれば、初めて大学の教壇に立ったのは若干25歳の時でした。それから37年の歳月が流れ去りました。平成２年、山口大学人文学部に赴任してからもいつしか17年が過ぎ去り、いよいよ定年退職と相なりました。感慨一入のものがあります。

天・地・人

七つの学部を擁する山口大学の陣容の整備状態は、地方の大学としては稀に見るところであります。幾多先達の尽力のお陰を以って、人文科学と自然科学の両学問領域が充実し、それぞれの学部がその個性を発揮して、学術文化の振興を担ってきた歴史は大切に受け継いでいかねばならぬと改めて思う次第です。自然科学は自然的現象を解明し、人文科学は精神的事象の意味を探究して、両者が大学存立の両輪をなす健全なる体制には意味がありました。しかるに現在、全国の風潮は先端科学技術の進展に専ら力を注ぎ、そうして、人の心の教育をおろそかにしてきた末の人心頽廃を思うとき、古来の天地人の思想に則った精神科学の果たす役割の重さを今更ながら痛感せずにはおれません。

教育の妙味

大学は外から見て、各学部の内実が明瞭に分かる組織でなくてはなりません。それは研究組織と教育組織が一体となってはじめて示し得るところです。そこにおいて、山口大学は都会のマンモス大学とは異なり、常に教師と学生との対話による接触が可能な場所でありました。このことは教育における生命線と言って過言ではありません。国からの運営費交付金が削減され続けるという厳しい現実はありますが、だからといって、効率化のために安易に学部を再編したり、あるいはまた学部とは別に教員組織というものを作り、そこからの出前講義を大学の中において始めたとしたら、折角育んできた教育の妙味も消え失せるでありましょう。

愛智のこころ

平成16年に大学が法人化され、競争原理が大幅に導入されて、経営の視点を重視した新しい組織運営体制となり、大学は否応なしに予算獲得と競走に打ち勝つ手段にしのぎを削る場所となりました。このような時代にあってこそ、我々は今一度大学の起源に思いを至す必要がありましょう。ユニバーシティという言葉から言うならば、それはヨーロッパ中世にできた学問を愛する自由なる人々の集まりでありました。智を愛する人々の集いが今日の大学の淵源であると考えられます。山口大学が「愛智」の精神に溢れた、品格のある学問の府であり続けることを念ずるものであります。

今日まで、山口大学で様々な方々に支えられて参りました。お陰をもちまして無事定年退職を迎えることができます。そのご恩に心より感謝し、山口大学の弥栄を祈念してご挨拶と致します。ありがとうございました。

英米語文化論コース学生主催の送別会（2007年１月18日）
（筆者：前列右から３番目）

学生を育てましょう

棚田　嘉博
大学院理工学研究科
情報・デザイン工学専攻　教授

家庭の事情で鹿児島大学から山口大学に転任して束の間の10年が経ちました。他大学を含め通算37年半の国立大学での教員生活に山口大学で一区切りを付けることに感慨一入のものがあります。山口大学での立ち上げからここまで多少なりとも人材育成に助力できたと思っています。

10年前の４月に最初にあてがわれた研究室３スパンは、工学部で最も古い建物の二階にありました。旧様式の工学部建物で、天井が高く威厳のあるものでした。しかし、コンピュータの空冷ファンの騒音が反響するという同僚の先生の忠告に従って、天井の防音、室内の塗装、配線の工事を行い、研究費100万円を使いました。自分の研究室は自分の研究費で整備するというのが大学の方針でした。まず、これが、最初のカルチャーショックでした。４月から卒業研究生が４人配属され、立ち上げのため頻繁にゼミを開きました。７月の夏休みのある日、いつものとおりゼミに向っていた卒業研究の女子学生が、車に撥ねられ脳挫傷の重症を負ってしまいました。しかし、奇跡的に回復し４ヶ月後から登校できるようになり、不自由になった右手のリハビリのために、私は、毎日１時間のゼミを開き板書を筆記させる訓練を行いました。そして、彼女は、強い意志で大学院の２次試験・卒業論文に合格し、その後、大学院を修了し、研究生を経て、現在は、職場で働いています。彼女は最も気になる卒業生です。私の１年後に助手が着任し、その後情報通信の研究が軌道に乗り、現在、卒業研究生、博士前期課程・後期課程の学生は総数25人を数え、知能情報システム工学科の学生に最も人気のある研究室の一つとなっています。

この10年の間に、全国的に大学は随分変わりました。山口大学工学部の学生についても、理数系の基礎学力が低い学生、精神的に弱い学生が多く見られるようになりました。原因は、ゆとり教育と、子供のときの興味や遊び、家庭や地域社会のしつけにあると思われます。工学部では、エンジニアとして実社会に出るための仕上げを行う必要がありますので、学士までの４年間あるいは修士までの６年間で学生が応用力・問題解決能力などを身に付けるよう鍛え上げなければなりません。まず、入学１年目では数学・理科の基礎学力が一定水準になるまで訓練し、場合によっては、サマースクールを開催することも考えられます。そして、従来どおり卒業研究・修論研究で応用力・協調性・指導力の訓練に時間を割くことができます。力のある卒業生を送り出してこそ大学の価値があります。

教員の定数が減って授業の担当に苦慮していると聞きます。退職された教員でボランティアで学生の教育を望み、むしろ生きがいを感じられる方はおられると思います。団塊の世代が2007年に大量に企業などを退職します。色々な技術を持った人達がいるでしょう。規制を緩めて、その人達が大学生から幼稚園児までの教育に参加できるようになれば良いと思います。人的資源を無駄にすることなく有効に使ったら如何でしょうか。

大学の教員は、現在、大変忙しく、一人で補導・教育・研究・運営・管理・事務までこなす状況です。少しなりとも、事務や管理などの負担を減らし、本来の教育・研究に専念できる時間を作ってあげるべきです。大学の先生が過労で倒れるという状況が生じています。適材適所への人員配置と業務システムの効率化を図るべきです。大学の役割は学問の開拓と伝承にあります。本来の目的を見失うことが無いことを望みます。

おわりに、お世話になった山口大学の教職員・学生・卒業生に感謝いたしますとともに、山口大学の発展を祈念いたします。

山口大学の更なる発展のために

増田　勉
教育学部
文芸・芸能コース　教授

私は昭和47年（1972年）に大学院を出てこの大学の教養部英語科に着任しました。新幹線がまだ岡山までしか来ておらず、東京出身の私は山口は実に遠いところだと感じました。爾来35年、とうとう一つの大学で定年を迎えることになりました。転勤話がある度に決断を迫られ、結局はここに留まってきました。この大学とこの町の居心地は私にとって捨てがたいものでした。

さて、定年退職に際して山口大学の発展に向けて何か意見を（辛口のものを歓迎）という編集部のご要望ですので、少し愚見を述べさせていただきます。

学問と教育が本務

平成８年（1996年）の教養部解体から始まり平成16年の国立大学法人化を経てこの10余年、大学は様々な改革に取り組んできました。より良きものを求めれば改革には終わりがないでありましょう。しかし、です。最近の我々は、研究と教育という大学の最も大事な本務にではなく、その周辺ともいうべき組織や形式作りにあまりにも多くの時間とエネルギーを奪われすぎてはいないでしょうか。本務に直接関わらない公務雑用が改革前に比べて圧倒的に増えています。これが常態化すれば大学の実質総生産は低下し、改革に込められた「理想」とは裏腹に、大学は却って疲弊してゆくだろうと思います。もうそろそろ、大学の本質を生かすため形式等を簡素化する方向に転換していってはいかがかと思います。

大学は企業になれない

今の大学は国立大学法人化以降、企業論理と学問の府の論理のせめぎ合いの下に置かれていると言えるでしょう。しかし、本来学問と利潤は結びつかないものです。利潤云々は結果論です。産学協同も経済効率も競争原理も大学が独立してやっていくためには大事なことですが、それのみで大学が存立していけるとは思えません。大学は世の中の流れの中で屹立する部分も持たねばなりません。流行のための不易を、実学のための虚学を、実践のための理論を、臨床のための基礎を、表層のいかなる変化にも対応でき得る底層の不変部分を、確保して深化させていかねばなりません。そのためには、もっと基礎研究をも、金にならない学問をも、長期的にでなければ結果の出ない研究をも、重視していかねばならないでしょう。

人こそ大学

最後に、言うまでもなく一番大切なのは「人」です。50代の人に「早く辞めたい」とか多くの有望な若手研究者たちに「他大学に移りたい」と思わせるとしたら、これはゆゆしきことです。そうなってはいくら器の見栄えに凝っても中の空洞化はまぬがれません。大学は「人」で持っているのです。山口大学は、ここで研究・教育を続けることに喜びを覚える大学、有為の人材をむしろ引き寄せる大学、であってほしいものです。

以上はかなり杞憂の面もあろうかと思いますが、私は山口大学の発展を心底から願うからこそ述べさせていただいたものです。

感　謝

私は教養部時代も、そして教育学部に移ってからも、幸い人間関係には大変恵まれました。今振り返ると、私にとってそのことが最も有難かったことです。お世話になった方々にこの場をお借りして心からお礼申し上げる次第です。

山口大学の福利厚生施設は改善すべきだ

三好　洋二
教育学部　保健体育選修　教授

はじめに

今回の特集テーマは「退職者は語る“こんな山口大学は×××だ！”」ということで、自由に辛辣に語って頂きたいということなので、特に吉田地区の福利厚生施設の不十分さと、それを踏まえてのキャンパスアメニティの充実を指摘したいと思います。もちろん、法人化された大学の厳しい財政状況は重々承知の上での意見であることは言うまでもありません。

「食育」施設の不十分さ

まず、こちらの大学に来てびっくりしたのは学生食堂の貧弱さでした。狭い食堂での昼間の混雑、ゆとりのない食事時間、高脂質の食事内容、よくも我慢できるものだと感じたものです。昨年、山大生協の第一学食「ボーノ」の席数が増席され、ハードの面では多少の改善があったもののまだまだ不十分な状況にあると思います。

昨今、「食育」の重要性が指摘されていますが、山大生も食を軽視し、朝食を抜いたり、インスタント食品やサプリメント類を嗜好したりする傾向が強いという実態も指摘されており、食育の取り組みは大変重要です。先日も朝日新聞紙上で、東京農業大学の小泉武夫教授が、「『食の堕落』は民族の存亡にかかわる極めて重要な問題である」と指摘されています。

山大生協でも１日千円までは何度でも使用できるミールカードを導入していて、学生の食生活を改善する取り組みが行われています。このシステムは保護者からも大好評で是非続けて欲しいという声が寄せられていると聞いています。このように「食育」にかかわるソフト面での改善が取り組まれていますが、それに応えるハード面での改善が一層望まれるのではないかと思います。

「知の広場」にかかわる施設の不十分さ

山大の理念は「発見し・はぐくみ・かたちにする　知の広場」ということですが、果たして福利厚生施設の現状はその理念を実現する状況にあるのでしょうか。学内の書店はキャンパスの片隅にあり、それも大変狭隘な施設です。また、学生のチャレンジを支援する留学や海外・国内の旅行を手配する窓口も片隅に追いやられています。さらに、キャリア形成支援にかかわる窓口やコミュニケーションを豊かにする場も不十分です。この点でのさらなる福利厚生施設の充実が望まれるのではないかと思います。

さらなる福利厚生施設の充実を

そこで私は、様々な事情を顧みずさらなる福利厚生施設の充実を願って、少々大胆な提案をしてみたいと思います。それは現在、アスファルトで固められ駐輪場と化した総合図書館前の広場に、それほど高層でもなくてもよいのですが、先程述べたような不十分な福利厚生施設を集約した建物をつくってはいかがでしょうか。この位置はどの学部からもアクセスしやすく多くの学生・教職員が利用しやすいのではないかと思います。

そこには専門書も含めて幅広い分野の書物を品揃えした書店があり、学生のチャレンジを支援し、キャリア形成支援に貢献するコーナーがあり、コミュニケーションをとる場としてカフェが設置されており、来校者をもてなす洒落たレストランもあるような、そんな施設です。

おわりに

編集者の意図に甘えて好き勝手なことを述べさせて頂きました。これも老いて去りゆく者の繰り言とご容赦願いたいと思います。最後になりましたが、定年まで、多くの人々の支えを受けながら平穏に過ごさせて頂いたことを皆様に感謝申し上げたいと思います。ありがとうございました。

学生系事務に従事した42年間を通して

安常　久巳
工学部　専門職員

はじめに

私は、昭和40年に山口大学経済学部厚生係に就職して以来、各学部・宇部工業高等専門学校と大半を学生系事務に従事してきました。音楽鑑賞団体の運営や教職員組合の活動など、大学以外のことも経験しましたので、違った視点で大学を眺めることもできました。この３月で定年となり、工学部の専門職員の職を最後に仕事を終えます。この場をお借りして、これまでお世話になった方々に心からお礼申し上げます。

今回、『退職者は語る』というテーマを頂戴しましたので、学生事務に従事してきた者の目から見た大学について感想を述べさせていただきます。

３年配置換えをやめて、最低５～６年以上に

学生系事務は、学部独自の内規・単位修得などに精通し、学生や先生の顔を覚えて対応する必要があります。また、全学との調整について過去のやりとりを詳しく知っておくことも必要です。現在の３年配置換えでは、顔を覚えて内規に精通する前に他部署に異動になります。これでは必然的に学部や学生や先生に愛着がわきにくくなり、形式的な対応になってしまいます。

以前、約40年にわたって文系学部の図書業務を担当された方がいらっしゃいました。その方は、先生方の顔や約13万冊に及ぶ図書をおおよそ覚えておられ、先生から書籍名を言われると所蔵場所をスラスラと答えられるほどでした。先生方も研究を進めるのに助かったのではないかと思われます。

先生は学内委員を１年毎に替わられるので、情報の蓄積が少なく、的確な対応ができにくいうえ、事務も３年でコロコロ替わると改善案を作る間もありません。

最近は、職員削減で超勤が増大しています。長期配置で仕事の熟練度があがれば、超勤の抑制につながるのではないでしょうか。業者との癒着が起こりそうな経理業務以外は、長期配置が望ましいのではないかと私は思います。

少人数教育で、学生をイキイキさせよう

ある学部で、「予算確保のため学生定員を増やしたが、先生は増えないため、学生の質が悪くなり教えるのに苦労する」と耳にしました。しかし、以前、その学部では先生と学生が一緒に飲み歩き人生論を闘わせていたことを思い出します。

現在は、研究費や研究成果の獲得競争に追い立てられ、学生指導に十分な時間をかけられない状況なのでしょうが、これを改善する必要があります。

近年、単位さえ取れればよいという学生もいると思いますが、何か目的のヒントを与えることができる教育になれば、学生は何かをつかみ、自ら学ぼうとするように思われます。学生を活性化させるためにも、ゆとりのある少人数教育が必要だと思います。

歳月の贈り物

山根　智
医学部附属病院
放射線部　主任診療放射線技師

はじめに

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。淀みに浮かぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまりたる例なし。世の中にある人とすみかと、またかくのごとし。（「方丈記」鴨長明）

平成18年度で定年退職となります。勤続32年病欠無し。おかげさまで社会人のいわば皆勤賞を（社）山口県病院協会よりいただく光栄に与りました。これもひとえに放射線部の仲間や、大学病院の多数の方々の支えあっての賜物と感謝申し上げ、心より御礼申し上げます。

放射線部という職場

皆さんは、病院の放射線部といったら、何を思い浮かべられますか。胸部レントゲン写真を思い浮かべられるのではないでしょうか。それともCTスキャンでしょうか。現在の放射線部の仕事は実に多岐にわたり、一般撮影（胸・腹部・膝・その他）をはじめ、造影撮影・血管撮影・消化管透視・脊椎造影・尿路系撮影・婦人科系撮影・乳房撮影・骨密度測定・CT検査・MR検査・核医学検査（RI検査）・放射線治療等々。

大学病院は裁判所に例えたら、さしずめ最高裁判所といったところでしょうか。先日もこんな患者さんがいました。「朝一番で広島から新幹線で来ました。Webページでいろいろ調べて、ここが１番いいと思い来ました。」写真は２部作成し、１部はセカンドオピニオン用に持ち帰られました。こんな時、技師冥利に尽きます。

もう10年以上も昔になりますが、放射線治療を担当していた頃、こんな事もありました。その患者さんは、いつも同じ時刻（10時ころ）に放射線治療（ライナック治療）に来られていました。待合室には、いつもなぜかビートルズの同じ曲が流れていました。その患者さんは、この曲は何という曲ですか、と尋ねられました。お好きでしたら、歌詞カードをコピーしてあげましょうと言って渡しました。こういう心の触れ合いが持てるのも放射線治療ならではないかと思います。最近では、病院の収入増を考える事で、こういった心の触れ合いが少なくなっているとしたら寂しいかぎりです。

こんな事もありました。消化管透視検査についていたころ、外来の患者さんが予定の時刻になってもなかなか現れず時計の秒針をじっと見つめていると、この秒間に人々の泣き笑いが凝縮されているんだと思えてきました。そんなことから、この文字盤の大きな（秒間が広い）懐中時計は現在まで片時も離したことはありません。放射線部というところは、時間に追われて過ごすことが多い職場だと思います。

時代精神

これからの社会は、努力した人には、それなりの報酬が得られ、努力しない人には、それなりの評価しか得られません。それが現代の時代精神だとすると、厳しい現実が迫ってきて息苦しくなってきます。時代精神といえば、先の六本木の回転ドア事故でも明らかなように、現代は、結果責任より原因責任を重くとらえる時代です。医療の分野とて例外ではありません。インフォームドコンセントが強く叫ばれて久しくなります。時間をかけて説明しても、医療の分野には、両者間にはその知識（専門）の非対称という問題があり、困難を極めることでしょうが、できうるかぎり、易しい言葉で分かりやすく説いていく努力はますます必要でしょう。

有言実行が無言実効より高く評価されがちなのも現代の時代精神と言えるのでしょうか。無言実効を美徳と教えられた団塊の世代もそろそろ退場のときを迎えようとしています。2009年５月には、国民裁判員制度が始まりますが、国民の義務としてそのための準備をぼつぼつ始めなくてはなりません。

私たちの住む社会は、絶えず変化して農業化社会、工業化社会、脱工業化社会、情報化社会、感性化社会、そしておそらく「法化社会」が間違いなくやって来るのではないでしょうか。最近では、知識基盤型社会、格差社会という言葉もよく耳にします。

豊かな社会

さて、目を海外に転ずると、依然として異文化社会間の衝突があり、その利権をめぐる紛争が絶えません。まだまだ、一波乱有りそうです。

心豊かな社会はいつ、そして、本当にそんな社会があるのか、杞憂になればよいが、楽天家といえども、つい考えてしまいます。「少子高齢化」なんと嫌な言葉です。末筆ながら、山口大学のさらなる発展を祈念致します。

学　生　が　主　役

山本　直行
学務部　学生支援課　専門職員

大学ならではの思い出

昭和44年４月９日深夜、事務局宿直室で仮眠中にヘルメット姿の全斗連の学生が土足で座敷に上がり込み「今から事務局を封鎖する。」と私たち当直者を外に出るよう強要、自分の家を荒らされるような非常に悔しい思いで外に出たことを思い出します。この日から21日間、要求の実現を求め学長室を根城に事務局を封鎖し続けましたが、以来46年頃まで続く大学紛争の中で大衆団交、校舎バリケード封鎖、授業料不払い運動など事あるごとに立場の違いで活動学生と対峙せざるを得ない状況でした。同年代であった当時の学生はまさに「団塊の世代」、今年から始まる大量退職時代を迎えることから、社会に与える影響が大きい世代であることは昔も今も変わっていません。

大学は学生が主役

廣中元学長が在任中に提案された「おもしろプロジェクト」「報奨制度（学長表彰）の対象拡大化」など学生にやる気を起こさせるものや、「入学式等に学生を司会進行役抜擢」のように直接大学運営に参加させるものなど、卓越した発想と強い指導力のもとに実現され、今ではすっかり学生の中に定着し全国に誇れるものとなっています。また、最近では本学が国立大学法人でいち早く導入した特待生制度や授業料徴収時期の繰り下げなどを取り入れてきています。

通称、廣中レポートと呼ばれ文部科学省に設置された調査研究会の座長として平成12年に報告された「大学における学生生活の充実方策について」は全国の大学が学生支援等をする際の指針として、学生と直接対応する者にとっては非常に心強いものとなっています。報告の中で「学生中心の大学へと視点の転換を図る。」と提言されており、言い換えれば「学生を主役」とする先生の精神が本学においても着実に育っているものと思います。

最後に

４年前、学生と直接関わる仕事を希望し現在の学生支援センターで課外活動や学生寮・福利施設を担当しました。これまでの経験と世話好きな性分を生かしクラブ・寮生たちの活動を精一杯サポートしてきたつもりですし、老朽化している施設等の維持管理に奔走してきました。今一番心残りである築後40年となる学生寮（吉田寮・椹野寮）の行く末について、改修か新築か、また併用案か結論が出ていませんが、「学生寮は大学を写す鏡」であることからきっと再生するものと期待しています。

体育会　追い出しコンパにて
（筆者：二列目右から２番目）

工学部循環環境工学科の新設

■喜多　英敏　教授　大学院理工学研究科　環境共生系専攻

温室効果ガス排出量を削減する具体的な数値目標を定めた京都議定書の発効により、日本は2008年から５年間で1990年基準の排出量の６％削減が義務づけられています。2008年はもう来年です。あと５年で目標を達成するにはあまりにも切迫感がなさすぎるように思います。今世紀は「環境の時代」であると言われますが、地球を持続させる完全循環型社会へ向かうのか、資源の枯渇と環境の悪化による破局へ向かうのかの岐路にあるのです。その破局を避けるため技術に何が出来るのでしょうか。そのための工学教育システムの再構築が循環環境工学科の新設です。

設置の趣旨

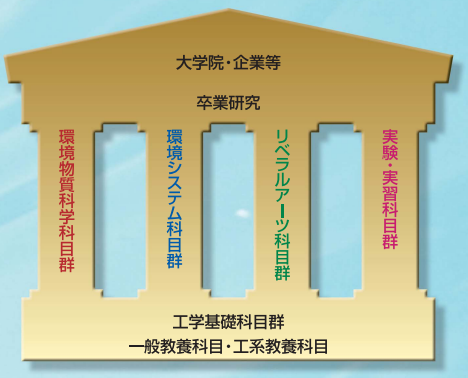
工学部では、大学全体の教育研究活動の理念「発見し・はぐくみ・かたちにする　知の広場」を念頭に置き、１．科学技術の基本に立脚し、人類に有益な道具や知的資産を具現化する“ものづくり”ができる人材、２．総合的、学際的な教養に立脚し、自らの課題と地球環境や人類全体との関わりについて総合的に考え、判断していく能力のある人材、３．国際的に通用する技術者の養成と生産物に対する責任と倫理観を持つ人材、の育成を行ってきました。そのなかで、特に「環境」に対する新たな社会ニーズに対応する高度専門人材育成を目標に、平成10年度に理工学研究科の独立専攻として「環境共生工学専攻」を設置し修了生は機械・化学・電気等の製造業や建設系企業、政府及び自治体などにおいて開発、設計及び企画等の業務で活躍しています。さらに、幅広い環境分野にわたる高度専門教育を達成するため、工学系に限定された従来の「環境共生工学専攻」に加え、生物圏及び物質循環に係る要素技術の教育研究指導に伴う理学系の生物と化学及び医学系教員の参加、農学系の教員の協力を得て、平成18年度からは「環境共生系専攻（博士前期・後期課程）」がスタートしました。一方、学士課程教育の実質化を目指し、社会ニーズに沿った人材育成を行う教育プログラムの検討を進めると同時に、教育システムの改善等に着手し、大学院における「環境」関連分野の教育の実績と学士課程教育の見直しの検討を踏まえ、今回、機能材料工学科を廃止し、「ナノテク・材料」の教育は、既存の応用化学工学科及び電気電子工学科で実施し、「環境」に対する社会ニーズに対しては、関係分野の協力を得て循環環境工学科(Department of Sustainable Environmental Engineering)を創設して人材育成を行います。

教育研究上の理念・目的

我が国における「環境」に関する工学教育（Environmental Engineering）は衛生工学を嚆矢とし、都市工学を含めた土木工学系への展開と公害問題の激化に伴う化学・化学工学系学科での取り組みが行われてきました。しかし、21世紀の半ばに顕在化すると考えられるエネルギー資源の枯渇、地球の温暖化、廃棄物の大量発生という困難な状況においては、分化した専門知識のみでは問題を解決できません。環境と共生した新しい持続的発展可能な循環型社会システムを構築する視点が不可欠です。循環環境工学科では、「持続的発展のための技術（Sustainable Engineering）の教育研究」をキーワードとした教育体系を具体化し、地球環境を持続させるための循環型社会の構築に資する人材養成を目的とします。具体的には、環境計測と循環型資源・材料開発をふまえた基礎教育を実施し、「専門基礎力」、「人間力」、「総合力」及び「国際力」を身につけた、産業界が求める環境系技術人材を育成し、地域産業界のみならず、東アジア各国等の国際社会の人材育成ニーズに応えていくものです。さらに、新たに同学科を創設することにより学士課程から博士前期・後期課程を通した「環境」に関する一貫教育を展開することも可能となりました。素材産業の集積が高い西中国・北九州地域では、北九州エコタウンや中国経済産業局の循環環境型社会形成プロジェクトによる新産業の創出など、近年環境産業への注力が認められ、環境技術が具体的なビジネスとして展開され始め、人材育成への高いニーズがあります。総合科学技術会議の分野別推進戦略によれば、環境分野では時々の環境問題に対応した必要な人材のタイムリーな供給不足が指摘されており、「物質科学」と「物質循環」の素養を基に、地球環境を持続する循環型社会の実現に寄与する人材育成を意図する新学科の責務は大きいことを循環環境工学科教員一同自覚しています。

●こんなことを学びます。（主要科目）

『基礎力』『人間力』および『国際力』『総合力』が身につく教育カリキュラムを提供します。これによって、[1] 環境に関係する物質の計測技術、[2] 化学物質の安全性・危険性や材料の性質、[3] 計測機器や環境浄化機器の設計、[4] 自然環境保全などに関する知識を系統的に身につけるとともに、外国でも活躍できる語学力と幅広い教養を習得します。



●このような人に育てます。

将来、どのような職業に就きたいかによって、講義履修プログラムを準備しています。目標をもって講義履修プログラムを選択することができます。

- ■物質の化学的性質および物質の環境の中での循環に関する知識や技術をしっかりと身に付け、かつ常に環境に対して配慮した研究・開発ができる研究者や技術者
- ■環境系プラントメーカー、環境系コンサルタント等で活躍できる環境浄化技術に精通した環境エンジニア
- ■企業における環境関連部署や環境材料開発で活躍することができる技術者
- ■官公庁で環境に関連した行政的な仕事ができる技術者
- ■「環境計量士」や「技術士（環境分野）」などの高度な資格の取得をめざす人
- ■環境に関することをもっと勉強するために大学院へ進学し、将来研究者を目指す人

※詳細は、循環環境工学科ホームページをご覧ください。
http://www.kankyo.yamaguchi-u.ac.jp/

学内連絡先
TEL：0836-85-9661
E-mail：kita@yamaguchi-u.ac.jp

保健学専攻博士後期課程の新設について

山田　治　教授　大学院医学系研究科　保健学専攻

はじめに

私は2006年11月22日に、大学受験の合格発表で自分の受験番号を見つけたような、大変うれしい報告を山口大学総務部から受け取りました。それは、文部科学省の大学設置分科会にて山口大学大学院医学系研究科保健学専攻（博士後期課程）の設置が認められた、との審査結果を知ったからです。このトピックス欄ではその設置認可までの歩みをご紹介したいと思います。

背景

山口大学における看護教育は、1952年の山口県立医科大学の設立時に遡り、同年に医科大学附属准看護婦養成所の発足に始まります。1954年には山口県立宇部高等看護学校が設置され、1957年には山口県立医科大学附属高等看護学校に衣替えをしました。

一方、臨床検査技師の教育は、1960年の山口県立医科大学附属衛生検査技師学校設置に始まります。1967年４月に山口県立医科大学の国立移管に伴い附属高等看護学校と衛生検査技師学校も同年６月に移管しました。1972年には衛生検査技師学校が臨床検査技師学校へと改称しました。

その後両校は1979年に医療技術短期大学部として合併し、2000年には４講座の看護学専攻と２講座をもつ検査技術科学専攻を擁する医学部保健学科に、そして2005年には大学院修士課程の設置に伴い医学系研究科保健学専攻へと発展してきました。50年を超える長い道のりを経て、今、看護学と検査技術科学の教育施設の集大成として、保健学専攻（博士後期課程）が完成したと言えます。

認可までの歩み

2004年に独立行政法人化した山口大学は、今後５年間は年３％の教職員削減を行う、との中期計画を発表しました。少子化と共に進行する厳しい大学教育の環境で、大学組織の斬新な改革を進めなければ、旧国立大学といっても生き残れない状況となっています。これは、看護師や臨床検査技師などの国家試験受験資格が得られる保健学科でも同様です。優秀な学生を集めるためには、良質な教員を配置することが大切です。しかし、それだけでは他の大学との差別化はできません。

博士後期課程の発足は、2005年６月の山口大学本部で行われたヒアリングに始まります。なぜ必要か？入学生の見通しは？また大学院修了者のニードは？という当然聞かれる質問に応えるために、基礎的なデータ集積とその解析を行いました。より高度で安全な医療を求める国民の声に応えうる学部学生の教育とその教育が指導でき、研究を企画・実施できる教員や研究者の育成が求められていることを私はヒシヒシと感じます。それが博士後期課程の設置という目標につながりました。基本計画書や設置申請書は、塚原（現教育国際担当副学長）、東（現保健学科長）、山田の３人が各自の分担箇所を決め書類を作製しました。それをまとめ、読み直し・修正する、という終わりのない作業を2006年６月まで何度も繰り返しました。その間に合計４回にわたり文部科学省でヒアリングを受けました。

第２回目の印象は特に強烈でした。博士後期課程

設置の必要性やカリキュラムの説明などを聞いた担当者は、申請書に目を通し理由を告げることなく、「これでは駄目」の一言でした。この難関を乗り越える最大の好機は、本学に認められたSTTI（Sigma Theta Tau International）初の日本支部設置でした。この設置記念式典に文部科学省高等教育局医学教育課の和住淑子さんを招待できたことです。彼女に文書の問題点や不明確な内容を指摘していただき、修正や追加資料を作成しました。今振り返ると、この担当者がその内容を説明し、予算請求を行うために、内容の整合性があり、わかりやすい平易な文章による書類の作成が求められたのだと理解できました。その後のヒアリングは極めて順調に進み、11月の設置許可に結びつけることができました。

博士後期課程の概要について

博士後期課程の認可に伴い４月には第１期生を迎える予定です。その特徴を設置申請書から抜粋し紹介にかえさせていただきます。

「わが国の保健医療ニーズは、急速な少子・高齢化の進展に伴う疾病構造の変化、医療の高度化及び地域化、更に国民の医療知識の高揚等に伴い多様化している。それに伴い国民医療費は高騰し続けている。その中で、あらゆる健康レベルの人々に良質な保健医療サービスを提供し、かつ、適切な医療費負担に抑えることは国民的課題である。このような状況のもと、本学では高度の教育課程を提供するために山口大学大学院医学系研究科保健学専攻（博士後期課程）を設置し、①多様な医療情報を適切に分類・分析でき、洞察力・判断能力を有し保健活動の推進・地域社会の活性化に貢献できる能力、②高度先進医療の進展に対応し、エビデンスに基づく課題解決・技術開発・理論構築のできる能力、更に③グローバル化社会における医療課題に対応できる国際的な視野、鋭敏な国際感覚を身につけた教育・研究者及び高度専門職業人の指導者を育成する。」

おわりに

保健学専攻（博士後期課程）の定員はわずか５人ですが、私達はその設置が本学の発展に必ず結びつくと考えております。足かけ２年間にわたり、この作業を終始ご支援いただいた多くの方々に厚く御礼を申し上げます。

医学部保健学科全景

医学部保健学科内にて

学内連絡先
TEL：0836-22-2803
E-mail：osamuymd@yamaguchi-u.ac.jp

大学院技術経営研究科が広島市と北九州市に教室を開設

上西　研　教授　大学院技術経営研究科・研究科長

はじめに

西日本唯一の技術経営（MOT；Management of Technology）専門職大学院である大学院技術経営研究科は平成19年度から宇部市常盤キャンパス以外でも本研究科の授業が受講できるように、広島市と北九州市に教室を開設します。山口県以外で教室を展開する新しい取組を簡単に紹介させていただきます。

背　景

本研究科はこれまでに中国地域を中心に西日本各地でセミナーなど、MOTに関する各種の普及啓発事業に取り組んできました。その結果、産業集積度の高い広島や北九州では企業や組織で働く社会人の間でMOT教育に対するニーズが強く存在するものの、MOT教育を体系的に実施できる教育機関がなく、技術経営教育の早期実施を求める声が多いことが分かりました。こうしたニーズが顕在化している地域に早急に展開することが、本研究科の使命であり、地域の技術経営人材の早期の質量面での向上に繋がるものと判断しました。

実施体制

本研究科に所属する専任教員が交代で広島教室と北九州教室に出向いて講義や演習を行い、常盤キャンパスと全く同じ内容の教育が受けられる体制を採ります。また、各教室と常盤キャンパスの間を専用デジタル回線で接続しているため、本学と同等のネットワーク環境・サービスを提供することができます。なお、授業は社会人の通学の便を考えて土曜と日曜を中心に行います。

広島教室

路面電車の袋町駅の正面で、ビジネス街の中心に位置する和光広島ビルの３階（中区袋町５－28）に開設します。部屋の広さは77㎡あり、24人程度の受講が可能です。

連絡先
〒730-0036
広島県広島市中区袋町5－28　和光広島ビル３Ｆ

北九州教室

ＪＲ小倉駅新幹線口に隣接しているアジア太平洋インポートマート(AIM)の８階（小倉北区浅野３丁目８－１）に開設します。部屋の広さは50㎡で、15人程度の受講が可能です。

連絡先
〒802-0001
福岡県北九州市小倉北区浅野３丁目8－1
アジア太平洋インポートマート８Ｆ
TEL：093-647-1920　FAX：093-647-1921

おわりに

立ち上げたばかりなので、両教室ともに必ずしも十分な面積があるとは言えませんが、交通の便が極めて良い場所にあるので、本研究科だけではなく広島および北部九州の活動拠点として山口大学全体として有効活用していただければと考えています。

広島教室と山口大学常盤キャンパスの間を専用デジタル回線で接続し、本学と同等のネットワーク環境・サービスを提供。

学内連絡先
TEL：0836-85-9876
FAX：0836-85-9877
E-mail：mot@yamaguchi-u.ac.jp

2006年度山東大学・公州大学校・山口大学　三大学交流

■和田　学　助教授（国際センター主事）　人文学部　言語文化学科

本学の学術交流協定校である韓国・公州大学校、中国・山東大学から学生と引率者を招き、山口大学の学生との交流を図るというプログラムを国際センターが中心となって実施しています。

今回で三回目となる本年度の三大学交流は平成18年11月２日から11月９日までの日程で、公州大学校と山東大学から、それぞれ学生５人と引率者１人を招いて行われました。山口大学からは、各学部から中国・韓国からの留学生も含めて併せて34人の学生が参加しました。また、地域の９家庭の皆様には交流学生のホームステイ先としてご協力いただきました。

参加者の友好を深めるため、見学旅行や、日本文化体験などのプログラムが例年通り実施されたのに加えて、本年度の特徴として、「三国間の交流を促進するための課題は何か？」というテーマで各大学の学生が発表と意見交換を行うということを中心に置きました。発表の場では、永い歴史的関係、歴史認識の問題、さらには未来における関係促進に対する提案まで取り上げられました。また、これと連動した意見交換会では、主に歴史認識に関して議論しました。意見交換は、もとより意見の一致を目指したものではなく、相手の考えが自分の考えと異なることを受け入れるということを目標としていましたが、この目的は達成できたようです。参加者は隣接した東アジアの関係の重層性と重要性を認識する糸口を得ることができたと思います。

ホストファミリーの方々には３泊４日の間、交流学生のお世話をいただき、訪問学生にとっても、日本人の普通の生活を体験し、また、なにより各家庭の温かい情に触れることができたことは貴重な体験だったと言えるでしょう。

なお、末筆になりましたが、今回の三大学交流を支援して下さった、山口大学教育研究後援財団と日本学生支援機構の関係者の方々、この交流を支えてくださった学内外の皆様、積極的に交流を図った三大学の学生の皆さんに感謝いたします。

送別会での訪問団の挨拶の様子

学内連絡先
TEL：083-933-5272
E-mail：wadagaku@yamaguchi-u.ac.jp

「日本ネパール国交樹立50周年祝賀の集い」でセミナー講演を担当して

山本　真弓　助教授　人文学部　人文社会学科

国交樹立50周年祝賀会

2006年９月２日、東京は麻布の国際文化会館で、日本とネパールの国交樹立50周年を祝う催しがあり、その講演者の一人として招かれました。祝賀会は、(社)日本ネパール協会主催で外務省とネパール大使館の後援です。私は10年前、山口大学からカトマンズの日本大使館へ出張しており、国交樹立40周年記念事業のときには裏方を担当していました。そういった事情もあって、講演者として出席した今回の祝賀会はなかなか感慨深いものがありました。協会の歴代会長は元大使の方々で、私がお世話になった外務省OBや、外交関係樹立前からヒマラヤ登山の隊員として渡航した経験をお持ちの方々も出席された、実に華やかな祝賀の集いでした。

駐日ネパール大使館より大使のあいさつ

ネパールの人民戦争

ネパール研究の第二世代を代表する石井溥氏（元東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所長）の基調演説に続いて４人によるセミナー講演があり、その最後を私が担当しました。与えられたテーマは「ネパール社会における女性問題」です。あまりにも大きなテーマに当初は頭を抱えてしまいましたが、2006年はマオイスト（毛沢東主義者）による人民戦争の開始宣言から10年目にあたり、武装闘争が終ったばかりだったこともあって「マオイストの女性兵士」という一点に絞って話すことにしました。

言うまでもなく私は毛沢東という人を存じあげません。ましてや、彼の考え方に「共感」しているわけでもないのですが、伝えられるところによると、ネパールでは、マオイストの兵士とその支持者の４割が女性――しかも、若い女性――だといいます。もっとも、なぜ女性が？との問いに答えるのは簡単です。共産主義は「男女平等」だからです。ですが、武装闘争が終った今、問題は女性兵士の「これから」であろうと思ったので、ネパールの将来も視野に入れて、マオイストの女性たちの「いま」を話すことにしました。そこに「共感」するところが多かったからです。

マオイストの女性兵士たち

既婚の（つまり、家に子どもやお年寄りがいる）女性が新たにマオイストになった場合、家族がいるので戦いに出ることはできず、周辺的任務に就くことになるそうです。そして、若い兵士が戦いの最中に産気づいたら、森林で赤ん坊を産み落とし、そのまま置き去りにしたり村人に託したりして戦いに戻るか、ときには赤ん坊共々兵士自らが命を落としてしまうこともあるといいます。こういった報告を読むと、では、数多くの女性兵士はいったい何者なの

か？との疑問が湧いてくるでしょう。

圧倒的多数が少女、14～15才の少女たちなのです（わが娘と同世代！）。

男女平等、女性解放を標榜するマオイストにおいても、女性は結婚・出産によって周辺化されていきます。女性は「女性だから」周辺化されるのではなく、妊娠・出産・育児・家族の世話等々によって「戦えないから」周辺化されていくのです。兵士になった14～15才の少女たちは、戦闘のなかで男性兵士の子どもを産み、戦いから退いていきます。そして、新たな女性兵士（少女たち）が男性兵士によってリクルートされていくのです。武装闘争が終った今、彼女たちは元兵士として、ヒンドゥー社会に自分の居場所を見つけなくてはなりません。

民族衣装のひとつであるサリーを着て話す講演者（筆者）

ネパールから日本へ

講演者のなかの紅一点で、「最近のネパール情勢」「ネパールの民族と社会構造」「ネパールの近現代史」と題された講演の後の私の話は、ネパールから日本へ振り子のように戻ってきたようでした。セミナー終了後、NGO、JICAなど国内外の様々な機関を通してネパールと関わっている日本人女性たちと歓談する機会を得た私は、そんな感想をもちました。思えば、女性が増えているのは、ネパールのマオイストだけでなく、日本の若いネパール研究者も同様です。彼女たちの「いま」と「これから」にも想いを馳せた50周年の集いでした。

ネパール・・南アジアの国。首都はカトマンズ。ヒマラヤ山脈の南側のふもとに位置し、インドと中華人民共和国に隣接。

ＮＧＯ・・Non-Governmental Organizationの略
もともとは、国連と政府以外の民間団体との協力関係について定めた国連憲章第71条の中で使われている用語です。国際協力に携わる「非政府組織」「民間団体」のことを意味します。

ＪＩＣＡ・・（独立行政法人国際協力機構、Japan International Cooperation Agency）は、日本国政府の発展途上国に対する政府開発援助（ＯＤＡ）の実施機関です。

学内連絡先
TEL：083-933-5242
E-mail：mayumi@yamaguchi-u.ac.jp

山口大学埋蔵文化財資料館第6回公開授業「古代人の知恵に挑戦！－古代のお米をつくってみよう－」を開催

■田畑　直彦　助手　大学情報機構　埋蔵文化財資料館

赤米をつくる

埋蔵文化財資料館では、考古学や埋蔵文化財、山口大学構内遺跡の調査研究成果を地域の皆様に身近に感じていただくことを目的として、平成13年度から公開授業を開催しており、本年度で６回目となります。

本年度の公開授業は日本のお米のルーツとされる赤米をつくり、土器で炊いて食べてみるという内容です。山口大学教育学部と共催で、山口市大内御堀菅内にある山口大学教育学部実習農場で延べ５回にわたって行い、小学生４人、保護者・一般11人と教育学部学生に参加していただきました。

まず、５月27日に田植えを行い、６月24日、８月26日に稲の観察と草取りを行いました。その後、10月７日に石包丁などで収穫をして乾燥させた後、10月21日に臼や杵などを使って、脱穀・籾すりを行い、赤米を試食しました。稲は予想以上に成長が早く最終的には高さ約120cmにまで成長しました。

また、赤米は現在のお米よりやや硬いものの、甘い味がしました。

公開授業を終えて

参加者の皆さんは、実際の体験を通して楽しんでいただくとともに、米作りの歴史や大変さ、お米の大切さを感じていただき、自分なりの発見をしていただくことができたようです。なお、詳細については『デジタル山口大学』（http://ds21.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~www-yu/digma/index/）並びに埋蔵文化財資料館Webページをご覧下さい。

来年度も埋蔵文化財資料館では、本年度の授業内容を踏まえて赤米をつくる公開授業を開催する予定です。どうぞご期待ください！

田植え

草取り

参加者の皆さん

石包丁などによる穂摘み

臼と杵を使った籾すり

学内連絡先
TEL / FAX：083-933-5035
E-mail：yuam@yamaguchi-u.ac.jp
http：//ds.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~yuam-w/Shiryoukan.home/

吉田キャンパス（吉田遺跡）で古代の大型建物跡が発見されました

横山　成己　助手　大学情報機構　埋蔵文化財資料館

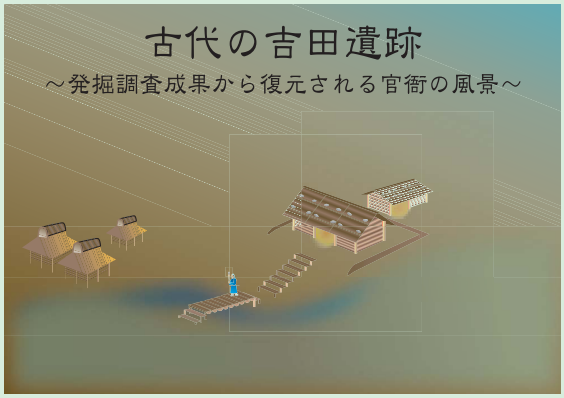
古代「官衙」が推定される地

平成18年の６月から８月にかけて、農学部附属家畜病院（現：附属動物医療センター）の改修工事に伴う発掘調査を行いました。調査地周辺での過去の調査では、古代（奈良時代～平安時代）の掘立柱建物跡や、「官」という文字が書かれた墨書土器をはじめ官人（古代の役人）が身につけていた帯飾りなど、官衙（古代の役所）の存在を強く示唆する遺構や遺物が数多く発見されています。本年度の調査でも、古代に関連する資料の発見が期待されました。

発見された掘立柱建物跡

吉田キャンパスの古環境

現在の山口大学吉田キャンパスの景観は、大学建設による大規模な造成がおこなわれたため、細かな起伏が目につきにくい状況にあります。しかしながら、周囲の自然環境を見れば、古代においては小さな岡や谷が入り組む複雑な地形だったことが想像できます。今回調査をおこなった地点でも、やはりキャンパス南方の山地から北に向かってのびる谷筋が確認されました。発掘調査では、土器や石器などの遺物や建物跡などの遺構を発見するだけではなく、自然環境を含めた歴史的景観を復元することが重要なテーマとなります。



古代の吉田キャンパス想像図

柱が残っていた！

今回の調査の最も重要な成果は、確認された谷の斜面地で２棟の掘立柱建物跡が発見されたことです。その内１棟は、長辺が約5.4m、短辺が約４ｍの大型建物でした。さらに驚くことに、柱穴とともに柱材自体が３本も発見されたのです。残っていた柱材は直径が約20ｃｍもある立派なものでした。木材は通常土の中で腐ってしまうものなので、このように遺跡から柱材自体が出土するのは極めて稀な例なのです。また、建物跡の直上を覆う堆積層からは、８世紀前半以降の土器が出土していないため、この建物は少なくとも８世紀初頭には埋没したものと考えられます。

埋蔵文化財資料館企画展を開催

埋蔵文化財資料館は展示替えのため３月中は休館していますが、４月からは企画展『稲作到来～弥生人　つくった　とった　たべた～』を開催します。是非一度足をお運び下さい。

学内連絡先
TEL／FAX：083-933-5035
E-mail：yuam@yamaguchi-u.ac.jp

「周南地域と山口大学の交流会」開催

■小野　静生　総務部総務課　課長補佐

初の試み

平成18年11月21日(火)15時から、周南市内のホテルで「周南地域と山口大学の交流会」が開催されました。

この交流会は、折に触れ“山口大学の姿がよく見えない”との声が地域の方から寄せられるのを受け、山口県内各地域の企業主等に山口大学をもっと知っていただくとともに大学に対する要望意見等をお聴きし、大学と地域との連携をより強化することを目的とした新たな企画で、トップを切って周南地域で開催されたものです。

大勢の企業主が出席

交流会には、徳山、新南陽、下松及び光の各商工会議所を通じた呼びかけに応じ地域の企業主等51人が出席され、山口大学及び山口大学教育研究後援財団（以下「財団」）からは、丸本学長、三浦前財団理事長等19人の計70人が出席しました。

充実した交流会

交流会は、丸本学長及び岡田徳山商工会議所会頭の挨拶でスタートし、山口大学の「概要」、「教育」及び「研究」に関し、村田、塚原、杉原各副学長からそれぞれ紹介があった後、田中人文学部長から、「徳山藩の成立」と題した卓話が披露されました。ご当地題材への興味と巧みな話術で各出席者はすっかり話に引き込まれた様子でした。続いて、大坂財団理事(理工学研究科教授)から、設立５年目を迎えた財団の概要とこれまでの活動状況について紹介があり、その後、お待ちかねの意見交換へと移りました。

意見交換は最重要コーナーと位置付け、多くの時間が充てられましたが、村田副学長の巧みな進行もあって、質疑や要望意見等の発言が続出し、それに応える大学側とのやりとりで時間オーバーになるほどの盛り上がりとなりました。

その後、全出席者による懇親会が催されました。丸本学長の挨拶で幕が開き、秋野光商工会議所会頭の発声による乾杯で開宴となりましたが、間もなくあちこちに賑やかな交流の輪ができ、和気藹々のうちに時が過ぎました。最後は、前川医学部長の発声による乾杯でお開きとなり、盛会のうちに全てのプログラムを終了しました。

地域交流会開催候補地

終わりに

本学のあらましを知っていただき、大変貴重なご意見も多くいただいたうえに、大きな交流の花も咲かせることができ、本学にとって開催の意義が極めて大きい会となりました。

初の試みで、まさに手探り状態での開催でしたが、所期の目的を十分に達成することができたことで、関係者は、次回以降の開催に自信を深めています。この会は、山口県内を５～６ブロックに分け順次各地域をまわる企画としてスタートしたものであり、今後、その計画どおりに進められることになりそうです。本年度は周南地域での開催のみとなりますが、来年度は年度初めの早い時期に第２回を開催し、年間２～３回の開催を目指すことになると思われます。

地元経済会を代表して挨拶される岡田徳山商工会議所会頭

主催者挨拶を行う丸本学長

懇親会で地元企業主と懇談する三浦財団前理事長、丸本学長ら

学内連絡先
TEL：083-933-5005
E-mail：sh015@yamaguchi-u.ac.jp

ＳＤ研修

山口大学では、（財）山口大学教育研究後援財団からの助成等により、ＳＤ研修（スタッフ・ディベロップメント）を実施しています。

これは、職員を海外に派遣することにより、派遣先の管理運営方法及び教育研究体制に直接触れたり、大学運営の現状や課題を把握できる視野を身につけることによって業務の改善につなげてもらうことを目的としています。

職員から希望者を募り、海外派遣に対して目的意識のある職員を毎年２人程度選考・派遣しています。

平成18年度はリジャイナ大学（カナダ）とエアランゲン・ニュンベルク大学（ドイツ）に各１人を派遣しました。

両大学とも、本学の学術交流協定校です。（以下、２人の記事を掲載します。）

SD研修を通して ～業務を見つめ直す～

笹本　祥子　情報環境部　学術情報課　情報サービス係

10月23日～10月30日の８日間、SD（Staff Development：職員研修）研修を受ける機会をいただき、本学の協定校であるエアランゲン・ニュルンベルク大学（独：バイエルン州）へ行くこととなりました。エアランゲン・ニュルンベルク大学は、本学とは異なり、キャンパスが無いので街の至る所に大学の建物が点在していました。古い民家をそのまま研究室に使っていたり、市民公園の中に図書館があったりと、小さな街全体がキャンパスのような印象を受けました。

私は現在、総合図書館で利用者へのサービスを担当しております。海外の図書館サービスを知ることで、日本で「これが当たり前」と思われている既存のサービスを見直したいという想いがあり、SD研修を希望しました。図書館サービスにおいて先進的なイギリスやアメリカではなく、ドイツを選んだ理由は、英語圏の大学にはすでに他大学からも視察に行っており、出張報告や資料等から、日本にいてもある程度の情報を得ることができたからです。

今回の研修では、大学図書館だけでなく、研究室の図書室や、ニュルンベルク、エアランゲンの市立図書館、バンベルグにあるバイエルン州立図書館（計９ヶ所）を見学し、それぞれの司書の方々にインタビューを行いました。また、日本学のゼミの時間を割いていただき、「学生からみた図書館」をテーマに、学生13人と意見交換も行いました。

ドイツの図書館は、とても歴史を重んじており、英米ほど革新的なサービスは行われていませんでしたが、今まで、英米のような先進的な取組みや、新しいサービスを行う図書館が良い図書館であると思い込んでいた部分があったので、ドイツの歴史や伝統を重要視する姿勢は、とても新鮮に感じられました。資料の選定に時間をかけ、古い資料を大事に保存し、専門性と誇りを持って仕事をしている姿は、まさに「図書館員」でした。日本では資格取得制度の違いもあり、各学術分野に専門的知識を持っている司書を配置するというような体制をそのまま取り入れるのは難しいと思います。しかし、質の高い図書館を作るには、職員自らが自己研鑽を行い、利用者ニーズを捉えたサービス展開の必要性を感じました。そのためには、新しいサービスを導入することも大切ですが、配架の整理や、カウンターでの対応など、基本的なサービスを再度見直さなければならないと思いました。

また、見学した図書館の中には100年以上も独自の目録体系を引き継いでいるところもありました。そこでは古い目録カードを電子化し、OPAC（蔵書検索システム）へ登録すると同時に、見出し検索用の目録カードを作成していました。一見二重の作業

日本学ゼミ

のように思えますが、なぜ、わざわざ手間がかかることをしているのか尋ねたところ、利用者にとって、見出し検索をする時に、OPACよりも目録カードの方が検索しやすいため、手間はかかるが作成を続けているとのことでした。業務の効率化が叫ばれる今日ですが、効率化を考えるがために、サービスが疎かになってはならないと思いました。前述した目録カードのように、手間がかかっても続ける意味があるものを、効率化の中で見落とさないよう、常に利用者の視点に立って考えられる職員になりたいと思いました。

また、現在、バイエルン州の大学は過渡期にあります。というのも、今までは授業料制度がなく無料で授業を受けられていたのが、日本に比べると少額ではありますが、授業料制度が開始されるそうです。有料になることに伴い、エアランゲン・ニュルンベルク大学も、学生サービスの向上を全学的に検討しているという話を聞きました。今後、どのようにサービスを展開していくのか注目したいと思います。

州立図書館

学内連絡先
TEL：083-933-5183　内線6191
E-mail：sasamoto@yamaguchi-u.ac.jp

リジャイナ大学での研修を終えて

■中村　岳詳　経済学部　学務係

私は経済学部学務係で平成18年９月まで１年間留学関連業務を担当しており、その中で留学生に対する指導やサービスを海外の大学ではどのように行っているのか、また山口大学から派遣された留学生はどのような生活をしているのかということに強い関心を持っていました。また教務関連においても、他大学ではどのように指導・運営を行っているのか関心があり、今回の研修に参加させていただきました。

今回の研修の内容については、事前に質問事項を用意して、訪問時にインタビューさせていただくとともに、お互いの大学の現状などについて意見交換を行いました。インタビューの内容は留学生の受入れ体制や、学生の履修登録、学生指導などを中心としたものでした。また大学附属のESL（English as a Second Language）という語学教育機関の職員の

方々にもインタビューを実施したり、意見交換を行ったりしました。

研修先のリジャイナ大学（カナダ）は学生数が約12,000人の大学で、山口大学と強いつながりがあり、本年度も経済学部から３人の学部生がリジャイナ大学に留学しています。リジャイナ大学では現在約900人の留学生を受入れており、この留学生数は山口大学の約３倍にあたります。これらの留学関連の事務の体制は山口大学と似ており、OICD（Office of International Cooperation & Development）とISSO（International Student Success Office）という二つの部署で構成されています。前者は山口大学でいう国際課国際交流推進係、後者は同課学生交流係にあたる役割を担っています。私はOICDでのインタビューの中で、これからの他大学との交流協定に関する考えなどについて伺いました。リジャイナ大学は現在海外の約100校の大学と交流協定を結んでいますが、今後の大学の方針としては、協定を結んでいても実際に交流のない大学とは協定の更新はせず、実際に交流のある大学との関係をより強いものにしていくことだと、OICDのトップの方が言われていました。

また、ISSOでのインタビューの中では留学生を受け入れた後、留学生同士やカナダ人の学生が交流できるようなランチタイムを設けたり、レクリエーションを企画したりするなど、留学生と現地の学生が交流を深められる機会を多くつくっていこうとする取組についてお話を聞かせていただきました。それ以外にも受け入れ後のオリエンテーションの話や、ISSO内での仕事の分担、現在抱えている留学関連の問題点など、参考になるお話をいろいろ聞かせていただきました。

今回の研修ではこの他にも、山口大学の学生のホームステイ先を訪問させていただいたり、実際に学生寮に滞在したりするなど、実際に留学した学生がどのように生活しているのかを体験させていただきました。また、リジャイナ大学の国際言語学科の日本語の授業や、ESLの授業に参加させていただき、これから留学したいと考える学生にアドバイスする際に、役に立つ経験をさせていただきました。

これからの山口大学での業務の中でこの研修で学んだことを生かし、より良い大学づくりに繋がるよう、努力していきたいと思っております。また今回の研修でできたリジャイナ大学の職員の方々との繋がりを大切にし、これからもお互いの業務などについて、意見交換ができればと考えています。

最後に、このSD研修参加にご理解を頂き、研修時不在の間仕事をフォローしてくださった経済学部の皆様と、ご支援いただいた国際課の方々に感謝の意を表し、SD研修の報告とさせていただきます。

リジャイナ大学の教員と

リジャイナの寒さ

学内連絡先
TEL：083-933-5606
E-mail：naka.t@yamaguchi-u.ac.jp

肢体不自由児のためのオモチャ製作

■中原　麻夏　大学院医学系研究科　応用医工学系専攻　１年

活動内容と目的

私たちは、肢体不自由児（以下、園児さん）のためのオモチャをつくる活動をしているサークルです（参加者：工学部機械工学科　北原愛子、野口唯、森宗健、西裕美子、機能材料工学科　駒川祐樹ほか、アドバイザー：工学部機械工学科　安田利貴先生）。このサークルが発足したのは、障害者の生活支援のために、私たちにも何かできることがないかと思ったからです。

私たちは、宇部市内にある療育園「うべつくし園」を訪問し、指導員の先生方と話をさせて頂きました。その中で、先生方から園児さんのオモチャについてお話を伺いました。お話の内容は、「既存のオモチャではスイッチ類が複雑に構成されており、園児さんが、自分の意思で動かすことが困難である」ということでした。これまでの問題解決策は、既存のオモチャに市販のタイマーや障害者用の大きな押しボタンスイッチを使用して、園児さんが遊べるようにしていました。しかしながら、この改善方法では、園児さんがスイッチを上手く使えない、稼働時間が短いなどの問題があり、自らの意思で好きな時間に好きなだけ、オモチャを動かすことは出来ませんでした。

そこで私たちは、園児さんの好みに応じた「刺激（音・光・動きなど）」を組み合わせたオモチャを提供したいと思い、肢体不自由児のためのオモチャをつくる活動を始めました。

オモチャの製作

うべつくし園の園児さんは健常児に比べ、腕の力が弱く、自由に動くことが困難です。そのため、園児さんの手の届く範囲で遊び続けることができるオモチャを製作しました。また、オモチャと人のインターフェイスとなるスイッチをシンプルで大きいものにし、園児さんがオモチャを動かせるようにしました。

これから

この活動を通して、うべつくし園の先生方、宇部市障害者ケア協議会の方々など、多くの地域の方と交流を持つことができました。また、本活動は、マスコミなどの高い関心が得られましたので、今後の大学の支援を期待しております。

（宇部日報：2006年11月29日、朝日新聞：2006年12月12日掲載、NHK：　2006年12月30日放映）

製作したオモチャ
（左からボイスレコーダ、避けようカー、ライントレースカー）

異文化講演会

日中歴史認識の乖離（かいり）を埋めるために ～ナショナリズムの垣根を越えて～

河村　美千子　人文学部　人文社会学科　３年

2006年11月10日、山口大学大学会館２階会議室にて、王智新先生による講演会「日中歴史認識の乖離（かいり）を埋めるために～ナショナリズムの垣根を越えて～」が開かれました。王先生は上海外国語大学卒業後、1985年に来日され、東京大学大学院教育学研究科博士課程を修了されました。現在は1994年に赴任された宮崎公立大学にて活躍されています。

いまだ解決を見ない日中歴史認識問題

今回先生は、今日の日中間の国民感情の軋轢（あつれき）の原因を、「過去の戦争」に対する日中双方の歴史認識をめぐる溝に求め、その溝を埋める方途について講演されました。「政冷経熱」が現在の日中関係を端的に示す表現として定着した感があり、いまや両国は、深い経済関係を取り結んでいながら、なにゆえ、両国の「真」の友好関係は結ばれないのか。それは、日中国交回復時に取り交わされた過去の戦争に関する総括をめぐる対立のゆえなのか。長きにわたる東西冷戦の時代に封印されてきた歴史問題が、教科書問題や靖国問題によって浮上してきたからなのか、ということでした。

講演の様子

先生はまずここ５年間を日中関係の「最悪の時代」だったとおっしゃいました。というのも、政治レベルにおいて、小泉政権の５年間、日中間で首脳会談が実現されることはありませんでした。国民レベルにおいても、2005年４月に起きた上海での反日デモは記憶に新しいでしょう。「日本に親しみを感じない」中国人の数は77％に達したそうです。この中国における反日感情の根源には日中の文化の違いがあることは否めませんが、日本が過去の戦争・侵略への反省を果たしていないこと、そして戦争で被害を受けた3,500万人の中国人への対応の仕方に対する不満がいまだに中国人の心の中に根強くあることを知りました。

日中の歴史認識を遮るもの

先生は中国人の心の中で日本人像が分立していて、葛藤が起きているのだとおっしゃいました。本来中国人の持つ日本人へのイメージは「虫も殺さない日本人」といった言葉に象徴されるような、命を大切にする国民であるという認識を持っているそうです。

にもかかわらず、日本人は61年前に中国において、あらゆる残虐行為を繰り返しました。現在平和をうたい、優しいはずの日本人が、どうしてあの時代に一般の日本人が「鬼」となって中国を侵略し、中国人を殺したのか…。61年前の日本人と、現在の日本人は何が違うのか…。中国人の心の中で長年このこ

日中関係の問題点を語る王氏

とに関する葛藤が存在し続け、これが歴史認識の差異を生む原因となっていると知りました。

日中の明日

中国人が日本人に抱く不信感には、日本人の歴史認識の浅さにも問題があるとおっしゃいました。戦後、多くの日本人は戦地で何を行ったか語ろうとはしませんでした。それは日本人のネガティブな面であるために、特に明らかにしようとされないまま歴史の暗闇に葬り去られようとしています。しかし、それこそが中国人の日本に対する感情を逆撫でしていると知りました。

日本人の歴史認識の不在性が今問われているのです。それは日本人の心の問題だと知りました。日中の明日のために、私たちができることは正しい歴史を認識することです。そのためには早急に歴史の事実を明らかにすることが求められると最後に強く先生はおっしゃいました。

異世代間コミュニケーション能力と異文化間コミュニケーション能力

長戸　智顕　経済学部　経済学科　４年

2006年10月13日、山口大学大学会館２階会議室にて、ペーター・アッカーマン先生による講演会「異世代間コミュニケーション能力と異文化間コミュニケーション能力」が開かれました。アッカーマン先生は、スイスのご出身でチューリヒ大学とバーゼル大学を卒業後、東京学芸大学の修士課程を修了されました。1990年からはドイツのエアランゲン・ニュルンベルク大学の日本学科教授としてご活躍で、私自身も同大学への留学中に大変お世話になった方です。

若い大人の異世代間・異文化間コミュニケーション

先生は今回、アイデンティティーを持ち始める若者（16歳から26歳まで）の異世代間・異文化間コミュニケーション能力について講演されました。人は成長の過程でさまざまな誤解や葛藤を通じてコミュニケーション能力を身につけてゆきますが、先生の研究の出発点は、この年齢の若者がそれをいつどこで習得し、どうやって大人とのコミュニケーションの「枠」に収めていくのか、ということでした。

異文化間コミュニケーション能力に関する従来の研究方法は、自国文化と異文化とのコミュニケーションを、それぞれのコミュニケーションパターンである「日本人とドイツ人との表現や行動」等から比較

するものでした。しかし、先生のご研究では、若者の年齢を限定し、彼らがアイデンティティーを持ち始める過程に注目し、そこから異世代間や異文化間のコミュニケーション能力を比較するという、違う観点からのものでした。

日本とドイツの「若い大人」像

先生の講演で興味を持った話の一つは、職場での礼儀作法やコミュニケーションのとり方が、日独で異なるということでした。これらに関する日本の手引き書には、利益の追求、上司や部下とのコミュニケーションの重視、仕事の際の体の動きや動作のスピードについて書かれており、会社内でのコミュニケーションと行動の目的が明確に例示されている一方、ドイツの資料には、それがまったく見られなかったと説明されました。

また、日本人研究者が危惧している「日本の社会や家庭内のコミュニケーション不足」についても触れられました。日本でのこの議論は西洋文化を規範として、それとの比較でなされることが多いが、そう簡単に日独の比較はできないと述べられ、その理由として、多様性や思想の違いを挙げられました。日本人研究者がモデルとしている西洋のコミュニケーションは、一部のプロテスタント文化圏のものであって、日本と同様にドイツ国内でも対話の欠如、家庭内暴力、人間関係の崩壊に苦慮していることを述べられました。

先生のお話を伺い、私たち「若い大人」は礼儀作法や社会規範を知ることにより、円滑な世代間・文化間コミュニケーションになるよう多くを経験し学んでいくことに気付かされました。

異世代間・異文化間コミュニケーションの今後の展望

先生は、日本のコミュニケーションの根底にあるものを三つ挙げられました。一つは陰陽の常識。万物を生物的なモノとしてみる思想で、立場の違う人との関係を作ることで、初めて組織ができるということ。二つ目は仏教の知恵。他者理解とはまず自己確立と自己変革をすること。三つ目は近代国家体制。道徳意識を持ち、昔から議論を好まぬ国民性を持っていること。これらを考慮した上で、先生の「自分とは別の世代に属する人間との葛藤や対立を解決することができないならば、自分の文化の外側にある、別の文化の人との葛藤や対立を、どのように解決できるのか」というメッセージが、私に強い印象を与えました。

今後社会人となり、世代の異なる方とのコミュニケーションに戸惑いながらも良い関係を築いていくこと、これが異なった文化的背景を持つ人との円滑なコミュニケーションに通じるのだと思いました。

若い大人の異世代間・異文化間コミュニケーションを語るアッカーマン教授

講演の様子

活躍する山口大学卒業生

『卓越したマレーシアの若者賞（The Outstanding Young Malaysian Award）2006』を受賞

■タイ・リメイ氏　大学院東アジア研究科修了者

タイ・リメイ氏（Dr. Lee Ming Tai, 大学院東アジア研究科、平成13年度入学、平成15年度学位取得、博士（学術））はマレーシアのクアラ・ルンプールで国際青年会議所主催の、卓越した世界の若者プログラム（The Outstanding Young Person's（TOYP）World Programme）で、2006年の「卓越したマレーシアの若者賞2006」受賞者16人のうちの一人として表彰を受けました。このプログラムと賞は1985年以来続けられているマレーシアでは権威ある賞の一つです。

この賞は毎年、マレーシアおよび世界で活躍し、顕著な功績を出したり、新しい試みなどに成功している18歳から40歳のマレーシア人に与えられるものです。ビジネス・企業活動、文化、教育、科学など10の分野から選ばれます。

タイ・リメイ氏は現在、フィリピンのマニラに本部を置く国際機関、アジア開発銀行（ADB）の職員で（社会開発専門家（南アジアおよびインド担当））マニラと担当する南アジアを往復する仕事に就き、道路などのインフラや社会建設のためのプロジェクトを担当しています。

受賞の理由は、日本とマレーシアにベースをおきながら、中国・ベトナム・マレーシアなどの子供のための教育、医療、児童施設などへのNGO活動、その創設と活発かつ継続的な活動が認められたものです。

「卓越したマレーシアの若者賞2006」にて
スピーチを行うタイ・リメイ氏

受賞を祝い家族と記念撮影

タイ・リメイ氏は、山口大学経済学部卒業後、海外経済協力基金（現、国際協力銀行、JBIC）に勤務の傍ら法政大学大学院経済学研究科で修士課程を修了しました。その後、山口大学大学院東アジア研究科で研鑽を重ねました。平成16年３月に授与された博士号のための博士論文題目は「マレーシアにおける住民移転の研究」でした。山口大学および山口に大いに関わり我々が育てた、これからの大きな活躍が期待される若き世界市民の一人です。

文責　大学院東アジア研究科　副研究科長・教授　松井範惇

私の研究

日本倫理思想史―時代遅れであやしげな学―について

柏木　寧子　助教授
人文学部　人文社会学科

どういう分野？

私は古代・中世の日本倫理思想史を研究しています。あまり一般に馴染みのない分野かと思いますので、簡単に位置を示しますと、人文系学問のうちの「哲学」（何やら小難しそう？）、その中でも「倫理学」（どんな立派な人格者の方が講ずるのやら？）、その中でも「日本倫理思想史」（相当うさんくさくて野暮？）を専門にしています。このように紹介するうちにも、敬遠やら揶揄やら警戒やらを誘っているのではと心配になりますが、困ったことに私自身、専門を尋ねられて「倫理」のひとことを口にするとき、いまだにためらいがあります。よく分からないからこそ勉強している、と学生なら率直に言えるでしょうけれども、教師がそれで許されるでしょうか。詐欺師になっていやしないかと恐れつつ教壇に立つ状態は、就職した初めも今も変わりません。が、この恐れがなくなるときは心底詐欺師になりきったときでは、と思うと、それもまたこわい気がします。

どういう作業？

具体的にどのようなことをしているかというと、私の場合、日本の古代・中世の文献、とくに物語類を読み、解釈して、人の生死・存在の意味をめぐる思想を取り出す、という作業をしています。はじめから論理が論理として見えやすい形で著されている文献もあるわけですが、どういうわけか、物語の形で考えられている内容に興味があります。そもそも物語を制作したり享受したりする経験とは何なのかということも、改めて考えてみるとなかなか答えが出ません。素朴な実感として、物語を読むときには自分を消去して別物になるよろこび、また、そこで何か真実に触れるよろこびがあるものですが、そのよろこびとはどのようにして成り立っているのだろう、と思います。もっとも、仕事として読むとなると「よろこび」ばかりでは済まされず、解釈という作業につきものの曖昧さ、自分自身という限界に毎度悩まされます。結局のところ対象を掘り、自分を掘る、正しく対象をつかまえているか大はずれなのかわからないけれども、ともかく掘り進む、それしかないように思います。やっぱり十二分にあやしげ、時代遅れの学問（もどき）かもしれません。

どういう課題？

目下いちばん関心をもっている主題は、〈人が仏になる〉ことを人々が物語を通じてどう理解したか、という問いです。「仏」というと、現代に生きる私たちにどう感じられるにせよ、昔の人々には素朴にその存在が想定されていたのだろうと、つい思ってしまいます。が、生き物とは輪廻するもの、望もうと望まざると生き物であることを延々やめられないもの、と考えられているとき、生き物であることを永遠にやめようと決意する者、決意をついに成就した者というのは、実に途方もない存在だっただろうと想像します。その途方もなさの感覚、驚きや憧れといった情緒も含め、できるだけ昔の人々になりすまして仏を捉え返すことをめざしています。といっても、この現代を放棄して昔へと逃避することもできません。信じること望むことが極端に困難と思える今日ですが、昔の人々もやはり困難な状況下であえて信じ望んでいたのだと知るとき、人間という生き物の深さを教わる気がします。少しでもその深さを知り伝えたい思いが研究の原動力になっています。

学内連絡先
TEL：083-933-5219
E-mail：kashiwg@yamaguchi-u.ac.jp

私の研究

人に優しい画像処理研究を目指して

末竹　規哲　助教授
大学院理工学研究科　自然科学基盤系専攻
（理学部　物理・情報科学科）

研究テーマ

“百聞は一見に如かず”と言われるように、今や画像は情報通信の主役です。しかし、“この一見”は人にとっては易しくてもコンピュータには難題です。私の研究室では、（1）「人にとって快適な画像の生成」、（2）「人が必要とする情報の画像からの抽出」といったテーマに関して、ファジィ理論やニューラルネットワークといった知的システム技術を利用して研究を進めています。

具体的には、（1）の人にとって快適な画像の生成に関しては、「視覚特性を考慮した擬似階調画像変換」や「明暗知覚モデルに基づく画像の見え方の改善」、「ぼけた画像から鮮明な画像の復元」、「色の違いを考慮したカラー画像のモノクロ変換」などに関する研究を行っています。（2）の人が必要とする情報の画像からの抽出に関しては、「インタラクティブな輪郭線抽出法」や「グラフ理論に基づいた画像領域分割法」に関する研究を行っています。紙面の都合上、すべての研究について説明することはできませんが、ここでは、「擬似階調画像変換の研究」について簡単に説明します。

画像の擬似階調表現法

デジタル画像を取り扱う場合には、画像の出力機器の制限などによって、元々の画像の階調を減らして出力しなければならないことがしばしばあります。例えば、モノクロのインクジェットプリンタで、画像を印刷する場合を考えてみて下さい。この場合、通常、黒色－灰色－白色までの256色（階調）あるデジタル画像を黒色と白色のみの２色（階調）で効果的に表現しなければなりません。このようなときに使われるのが擬似階調変換です。簡単に言うと「黒色と白色の点々でグレーをうまく表現する」ための方法です。これがどういうものなのか、実際に画像を例に見てみます。画像（左）は子供のモノクロ写真(256階調)です。それを擬似階調変換したものが画像（右）です。黒色と白色だけで、うまく画像を表現できていることが分かります(ドットのサイズ、つまり画素のサイズを小さくとれば、もっときれいに見えます)。人間の視覚特性には、画像中の空間周波数が特に低いものと、特に高いものに対しては、それらを敏感に見分けることが出来ない、つまり感度が鈍いという性質があります。この擬似階調変換（特に、研究対象の誤差拡散法と呼ばれるもの）は、その特性をうまく利用して画像の階調数（色数）を減らしています。研究室では、このような問題に対して、人間の視覚特性をうまく利用しながら、２値（色）化だけでなく効率的に多値（色）化するための方法論を研究しています。また、今後は、これらの技術を利用した新しい画像の符号化、伝送方式等の研究も進めていく予定です。

おわりに

最近の約10年間は、画像処理を中心に研究を進めて来ました。しかし、まだまだ勉強不足で、今後やらなければならないこと、やりたいことが山積みの状態です。

私は大学を卒業後、３～４年毎に関東－九州間の引越しを繰り返し、遍歴を重ねてまいりました。山口大学には今年で５年目になります。この辺で落ち着いて、じっくりと教育・研究に専念していこうと思っております。

学内連絡先
TEL：083-933-5703
E-mail：nsuetake@yamaguchi-u.ac.jp

私の研究

サルっておもしろい

藤田　志歩　助手
農学部　獣医学科

はじめに

私は野生霊長類の行動や生態を研究しています。私の専門とする霊長類学は、種々の霊長類を調べることによって「人間とは何か？」「ヒトはどのように進化したのか？」という疑問に答えようとする学問です。よく学生さんに「サルのどこがおもしろいのですか？」と聞かれることがあります。一言ではなかなか語り尽くせないのですが、研究のおもしろさの一つは霊長類のもつ行動様式や社会構造の多様さ・複雑さと言えるかもしれません。その魅力をどこまでお伝えできるか分かりませんが、これまでの私の研究を少しだけご紹介したいと思います。

メスはしたたか？！

私が霊長類の研究を始めたのは大学院に入ってからでしたが、最初に取り組んだテーマは「ニホンザルの性行動」でした。有性生殖をする哺乳類にとって、交尾とはすなわち生殖のための行動です。つまり、自分の子孫を残すためにオスは精子を、メスは卵子をつくり、これらを受精させるために交尾をするわけです。そのため、周期的に排卵がおこる動物種では、受精しやすいように排卵のタイミングを見計らって交尾をするのが一般的です。しかしながら、私たちヒトを含めた多くの霊長類では、このような排卵の周期に関係なく基本的にはメスはいつでもオスを受け入れることが可能です。

交尾はエネルギーコストが高く、感染症などのリスクも伴う行動であるため、なぜこのような一見「無駄な」行動が進化したのかという議論は昔からなされてきました。メスの性的受容性が長期化した理由として、受精しやすいタイミングをオスに知られないように隠すことで、子の父親となる配偶者をメスが選択しているという考え方があります。つまり、「好ましい」オスの精子を確保するため、メスは排卵の時期をオスに知られないようにすることで密かに子の父性をコントロールしていると考えられてきました。ところが、それを裏付ける実証的な研究はほとんどありませんでした。

研究の難しさは、同種のオスにも見抜けないことは観察者である人間にも外から見ただけではわからないということでした。そこで私はニホンザルを対象に、メスの性ホルモンの分泌動態から排卵日を調べ、同時にメスの性行動を詳細に記録することにしました。また、できるだけ自然な状態の行動を調べるため、宮城県金華山島に生息する野生のサルを観察することにしました。ニホンザルの社会は順位があるのですが、６頭のメスで観察を行った結果、どのメスも受精しやすい排卵の時期には最高位のオスとは１回も交尾をせず、その代わり第２位のオスや同じ群れに属さないオスとは頻繁に交尾をしていることが分かりました。ニホンザルのメスは、たしかに子の父親となるオスを選択していることが（意識的かどうかは別として）野生のサルで初めて明らかとなったのです。また、メスにとって順位の高いオスが配偶相手として「好ましい」というわけではないということも分かりました。

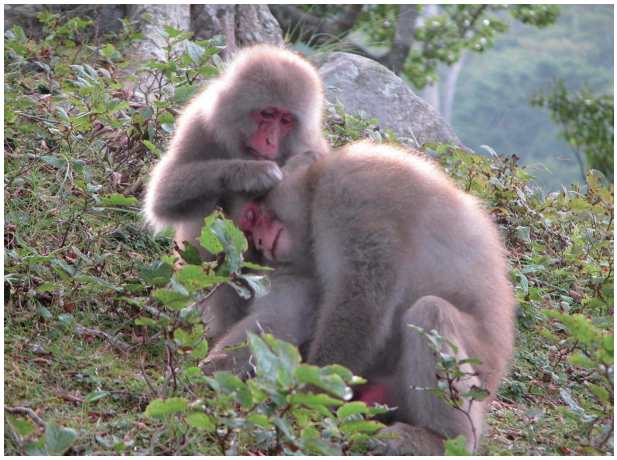


写真１
ニホンザルのメスがオスに毛づくろいをしているところです。繁殖を巡ってオスとメスの間で様々な駆け引きが見られます。

写真２
アフリカではチンパンジーやゴリラの調査もしています。写真はタンザニアのマハレ山塊国立公園でチンパンジーの観察をしている様子です。

野生霊長類の現状

現在地球上には200種以上の霊長類が生息しています。しかし、実にその８割が絶滅の危機に瀕していると言われています。種の絶滅は霊長類に限ったことではありませんが、その原因としては生息環境の悪化や森林伐採、乱獲などが挙げられます。霊長類はそのほとんどが熱帯を中心とした森林に生息し、生態系の中で重要な役割を果たしているため、霊長類を守ることはほかの野生生物の保全の図る上でも重要です。

種の絶滅はまず地域個体群の絶滅からから始まるため、絶滅を避けるためには個体群の特性や絶滅の危険性を把握しておく必要があります。出産率や死亡率といった繁殖特性は個体群の増減に直接関係しますが、気候変動、個体群密度、森林生産量の豊凶、農作物利用の程度、狩猟や加害動物としての駆除の有無など様々な要因で変化することが知られています。現在私は、金華山島と鹿児島県屋久島で野生ニホンザルの繁殖特性とそれに影響を与える要因について調べています。ニホンザルは寿命が約20年と長く、自然環境下では２～３年に１回かつ１頭を出産というゆっくりとしたペースで繁殖するため、繁殖特性を知るには地道な調査の継続が必要です。サルを追いかける日々はこれからも続きます。

学内連絡先
TEL：083-933-5882
E-mail：fujita@yamaguchi-u.ac.jp

農学部附属動物医療センター

平成19年１月１日農学部附属家畜病院は，農学部附属動物医療センターに改称しました。社会が求める高度獣医療を提供する二次診療施設として社会への貢献を果たしていきます。

お問い合わせ先：農学部附属動物医療センター　TEL：083-933-5931
動物医療センター係　E-mail：ag296@yamaguchi-u.ac.jp

私の授業

化学を教える

中山　雅晴　助教授
大学院理工学研究科　物質工学系専攻
（工学部　応用化学工学科）

使ってこその知識

修士課程を終えてから約４年間、研究から離れ、工場に勤務しました。大学では人並みに勉強したつもりでしたが、学んだことを引き出しの中から出すのは容易ではありませんでした。引き出しにあることすら忘れている場合も少なくありません。そんな中、有機化学の授業で聞いた「似たものは似たものを溶かす」という言葉が、妙に耳に残っていました。適当な溶媒が分からなければ、かたっぱしから似たものに溶かそうとしたし、誰かに尋ねられればこのように答えていました。シンプルな知識は頼もしく、いつでもどこでも使えます。

教える立場になってからは使うことを想定して、できる限りシンプルに説明するように心がけています。シンプルな話は美しいし、美しい話は印象に残りやすいものです。

“=”にはドラマがある

海外出張での長い乗継ぎ待ちの間、時間を潰すためにペーパーバックを買いました。タイトルは「$E=mc^2$」。この方程式は20世紀初めに提示されたもので、アルバート=アインシュタインの数ある業績の一つです。本の内容は、この方程式の本当の意味を理解するために、アインシュタインの一生を辿るというものです。この本を選んだのは、少し前に「無機化学」の授業でこの式を扱ったからです。“エネルギーEは物質の質量mと光の速度cの２乗に比例する、だから核分裂の際、ほんのわずかな量の物質から膨大なエネルギーが発生する”と説明し、例題を解かせました。アインシュタインの人生にまで考慮が及ばなかったのは言うまでもありませんが、“=（イコール）"を無邪気に受け入れ教えていることは、「時間の関係で…」だけでは言い訳できません。

小学生の算数の問題。みかん30個とりんご20個を合わせると何個になるでしょう？誰もが30 ＋ 20 ＝ 50と計算して解きました。大学に合格した人は、「合わせる」ことに疑問をもたなかった人です。みかんと本でも素直に足せたでしょうか？30℃のぬるま湯と20℃の水をいっしょにしただけでは50℃のお湯にはなりませんが、少し温めれば50℃になります。だから、“=”は無理でも、30 ＋ 20 → 50ぐらいは書いていいかもしれません。“=”には色々なドラマがあり、さらに化学には、“→”や“⇄”もあります。

少なくとも私が担当している化学（分析化学・無機化学・光化学）では、高級な数学は出て来ません。その代わり、想像力が必要になります。反応速度を表す式、$-d[A]/dt = k[A]$、を見ても積分するのを少し待ってビーカーの赤い水溶液がだんだんピンクになるのを思い浮かべて下さい。ピンクのビーカーはなかなか透明にはなりません。この方程式の読み方は、「Aの減少速度（反応速度）はAの濃度に比例する」です。“は”がイコールです。もちろん、反応速度がAの濃度に比例しないときもあります。つまり、右辺は結果です。しかし、Aの減少速度を言う限り、左辺は必ず$-d[A]/dt$です。つまり、左辺は定義です。だから、この式にマーカーで線を引くときは、左辺と右辺は別々にするべきでしょう。

教えるということ

読むことは学ぶことであり、「教える」ことは書くことに似ています。一つの論文を読めばある程度分かった気になりますが、一つの論文を書くとなると膨大な数の論文を熟読しなければなりません。教えることは難しく、労力を要します。また、論文の科学的価値がすぐには分からないように、その授業が学生にとって価値のあるものかどうかは、授業評価だけでは判断できません。

多くの場合そうだと思いますが、１つの授業は90分×15話で完結する長めの連ドラです。できるだけ面白くするために、２年目以降は話の順番を変えるなど色々と工夫します。こちらはストーリーを知っていても、初めて履修する学生は知りません。だから、肝心なときに休んでしまうことがあり、その学生は最後まで話が見えず、単位を落としてしまうかもしれません。しかし、何年後かに私の授業の断片的な記憶が、「似たものは似たものを溶かす」ぐらい威力を発揮してくれれば、教えるという義務を果たしたことになるのだと思います。

学内連絡先
TEL：0836-85-9223
E-mail：nkymm@yamaguchi-u.ac.jp

教員から寄せられた著書

山口県の子ども達の美術作品について

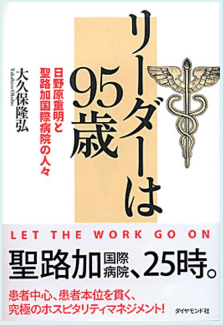
（福田隆眞監修　山口県造形教育研究会研究部編著　三晃書房　平成18年11月20日発行）

平成18年11月に山口県造形教育研究会の研究部の先生方と「子どもの絵は語る」と題する本を出版しました。山口県では約60年前から、幼稚園・保育園、小学校、中学校、高等学校、盲・聾・養護学校の子どもたちの美術作品展を「学校美術展」として毎年開催してきました。

本書は過去３年間の美術展の入選作品と日頃の授業作品を取り上げ、研究部の先生方約40人が美術作品の指導と評価のための解説をしたものです。また、学校教育と美術館との連携、子どもの描画表現の発達、系統的指導、評価の仕方などが平易に解説されています。

本書に取り上げられた132点の作品はすべてカラーで印刷され、幼児から高校生までの表現の発達が一覧できます。子どもたちの創造的で伸び伸びした作品を見ることができます。これらは昭和52年からの教育課程が児童生徒の学習を主体にし、個性や創造性の育成を目指してきた結果と思われます。本書が美術教育の理解と指導に少しでもお役に立てることを執筆者全員が祈念しています。

福田　隆眞　教授　教育学部　美術教育講座
TEL：083-933-5370　E-mail：t-fukuda@yamaguchi-u. ac. jp



「リーダーは95歳」～日野原重明と聖路加国際病院の人々～

（ダイヤモンド社　2006年11月発行）

日野原重明氏が山口県ご出身という事実を、本を出版してから初めて知りました。これも何かの縁かも知れません。20年位前に聖路加国際病院で内科医をしている親友の結婚式に出席して、仲人を務めていた日野原重明氏とお会いしたのが初めてでした。この本を書こうと考えたのは、さらにその以前、その親友が内科研修医として、聖路加国際病院のレジデント宿舎生活を過ごしていたときに、度々訪問していたことがきっかけです。友人は病院の歴史や荘厳な礼拝堂について熱く多くを語ってくれました。いつかこの病院の精神や医療のあり方について本にしたいと考え、30年近い時間を経てこの出版が実現しました。

現在、医療経営を巡る問題は深刻かつ複雑化しています。慢性的な財政難・人手不足という問題を抱える一方、高齢者の数は急速に増えています。現場では過剰労働や医療過誤という問題が頻繁に取り沙汰されてもいます。本書は、このような病院経営受難の時代にあって、常に患者満足度の上位に名を連ねる聖路加国際病院の歴史や医療現場とスタッフに焦点を当てています。医療改革やホスピタリティ・マネジメントに組織全体で取り組む有様を、著者独自の視点で克明に記載した病院ドキュメントであり、かつ病院経営の事例研究書でもあります。

救急医療・ホスピス・小児科・産科・訪問看護・乳癌外科・精神科などの診療科の改革内容に加えて、ITの導入・研修医教育・経営管理会計・サテライト型診療所の発足など病院経営のテーマについての病院の取り組みや考え方を詳細に紹介しています。

病院経営の難局に95歳のリーダー、日野原重明理事長がいかに問題を解決して、これから病院をどこへ導こうとしているのか。全国の病院経営の問題解決に民間の著名な病院の改革事例から示唆を与えることができればと著したものです。

＜2007. 1 .28 日本経済新聞書籍欄に掲載＞

大久保　隆弘　教授　大学院技術経営研究科
TEL：0836-85-9064　E-mail：tokubo@yamaguchi-u. ac. jp

平成19年度公開講座のお知らせ

講　座　名　・　講　師　名	受講対象者	開講期間	時間帯
歩いて、学んで、理解する。カタログにない秋吉台 講師：長畑　実（エクステンションセンター教授）、前田時博（秋吉台エコミュージアム館長）、 庫本　正（秋吉台科学博物館名誉館長）、多賀谷三枝子（秋吉台の山姥）、 永嶺克博（とってもゆかいな秋吉台ミーティング事務局長）	市民一般 （成人対象）	4 /21～ 4 /22	10:00～17:00 10:00～15:00
「おくのほそ道」を読む 講師：藤原マリ子（教育学部助教授）	市民一般	5/19、6/2、16、30、 7/14	14:00～15:30
小麦栽培から始めるパンづくり 講師：高橋　肇（農学部教授）、嘉村則男（同技術専門職員）、 徳永　豊（スリーヒルズアソシエイツ代表）、中司祐典（山口県農業試験場）	市民一般 （成人対象）	5/30、8/22、 11/7	10:00～15:00
市民のためのライフプラン講座 講師：石田成則（経済学部教授）、上津原　章（ファイナンシャルプランナー）	市民一般	5/26、6/9、23	14:00～16:00
プロの技術で挑む小麦栽培から始める地産地消のパンづくり 講師：高橋　肇（農学部教授）、吉見匡司（嘉川工業株式会社）、 末成秀一朗（創作ベーカリー秀「shu」店長）	過去に開催した「小麦栽培から始めるパンづくり」修了者	6 /27	10:00～16:00
小・中学校教員のための英語・国際理解指導者研修会（未定） 講師：未定	小・中学校教員及びテーマに関心のある方	詳細未定（8月）	未定
木工入門 講師：岡村吉永（教育学部助教授）	市民一般 （小学生以上）	①8 /10～ 8 /12 ② 8 /31～ 9 / 2	8:30～13:00
理科実験講座 講師：池田幸夫（教育学部教授）ほか未定	小・中学校教員	8 /21～ 8 /22	9:00～16:15
安らかな終末期を過ごすために 講師：東　玲子（大学院医学系研究科教授）、齊田菜穂子（同講師）	市民一般	8 /20～ 8 /21	10:00～12:00
今日から始めるグリーンライフ講座 講師：高橋　肇（農学部教授）、執行正義・藤間　充・竹松葉子（同助教授）、荒木英樹（同助手）、 嘉村則男（同技術専門職員）、長砂光治・谷口和也・井上敬之・高田　暁（同技術職員）	市民一般	8/31、10/5、 11/30、H20. 2/29	10:00～15:00
農山漁村での安らかな暮らしを願って、柿本人麻呂を祀る 講師：吉村　誠（教育学部教授）、高山宣道（八幡人丸神社宮司）	市民一般 （成人対象）	9/29～9/30	13:00～16:00 10:00～12:00
生活習慣病とメタボリック・シンドローム 講師：谷澤幸生・坂井田　功（大学院医学系研究科教授）、藤井崇史（同助教授）、三浦俊郎（同講師）、 梅本誠治（医学部附属病院助教授）、石原秀行（同助手）	市民一般	10/1、15、22、29 11/12、19	19:00～20:30
萩焼を生んだ山口の大地 講師：澤井長雄・永尾隆志・阿部利弥・大和田正明（大学院理工学研究科助教授）	市民一般	10/13～10/27 （毎週土曜　計3回）	13:00～15:00
「現代の教育問題」を読み解く 講師：小川　勤（大学教育センター教授）ほか未定	教育関係者ほか	10/6、20、27、 11/10、24、12/1	14:00～15:30
香りを科学する（防府会場） 講師：梶原忠彦（山口大学名誉教授）、松井健二・青島　均（大学院医学系研究科教授）、 赤壁善彦（農学部助教授）	市民一般	6/2、9、17、 24、30	13:30～15:00
温泉の話－山口県とニュージーランドの温泉を例にして－（防府会場） 講師：西村祐二郎（山口大学名誉教授）	市民一般	10/6～10/27 （毎週土曜　計4回）	13:30～15:00
やまぐちサタデー・カレッジ2007（異文化交流コース） 異文化理解の宗教学的アプローチ－聖なる表現の仕組み－ 講師：ジュマリ・アラム（人文学部助教授）	市民一般・学生	6/23～7/14 （毎週土曜　計4回）	15:10～16:40
やまぐちサタデー・カレッジ2007（外国語学習コース：英語） 英語に関する素朴な疑問について考える 講師：岩部浩三（人文学部教授）	市民一般・学生	6/23～7/28 （毎週土曜　計6回）	13:00～15:00
やまぐちサタデー・カレッジ2007（日本文化コース） 仏をめざす人々の物語を読む 講師：柏木寧子（人文学部助教授）	市民一般・学生	10/6～10/27 （毎週土曜　計4回）	15:10～16:40
やまぐちサタデー・カレッジ2007（外国語学習コース：フランス語） 「星の王子さま」をフランス語で読む 講師：井上三朗（人文学部教授）	市民一般・学生	10/6～12/1 （毎週土曜　計8回） ※11/3を除く	13:30～15:00

お問い合わせ

山口大学エクステンションセンター
〒753－8511　山口市吉田1677－1
TEL(083)933－5059　FAX(083)933－5154
E-mail:kyoutu@yamaguchi-u.ac.jp

・電話受付の場合：月曜～金曜　8：30～17：00　（土・日・祝祭日は除く）

新聞掲載された山大・地域から見た山大

11月

◆ 第63回中国文化賞　－山口大学長 丸本 卓哉氏－
微生物の生態を農法、緑化に応用
土自体の生産力に光　（中国：3日、11日）

◆ 駅前　複合施設内　ビジネス街
－山口大「専門職大学院」の北九州教室－
大学、こぞって街へ
便利さと知名度アップ狙う　（朝日：4日）

◆ 〝見たまんま〟写るんです
－山口大グループ開発－
遠くの被写体大きく修整　（読売：5日）

◆ 芸術守る優しい光
白色ＬＥＤ発熱少なく
大学院理工学研究科田口 常正研究特任教授
医療用を転用　（読売：7日）

◆ 全入時代の学生白書
内定ゼロの４年生救え！
実績向上へ大学の〝親心〟　（読売：8日）

◆ 液状化現象実験など
－大学院理工学研究科 山本 哲朗教授－
下関　長府小で防災授業　（山口：8日）

◆ 大学 経営 新時代　第２部　“集客”大作戦
技術経営（ＭＯＴ）の専門職大学院を
社会人向けに開設
〝即戦力〟企業に送る　（毎日：8日）

◆ 医学祭でＨＩＶ抗体検査など実施
山大、11・12日に　（山口：9日）

◆ 都市再生　提　言　②
人文学部教授小谷 典子さん
（都市社会学）
周辺部元気で一体感
地域のリーダー育成を　（中国：9日）

◆ 大学 経営 新時代　第２部　“集客”大作戦
少子化対策の切り札
留学生に熱い視線　（毎日：10日）

◆ 日本平和学会あす研究集会
－山大吉田キャンパスで－　（朝日：10日）

◆ 過去に地震跡くっきり　－阿東活断層－
理学部金折 裕司教授らでつくる地震
テクトニクス研究グループ
現地説明会に50人参加
（山口：11、12日・中国：12日、読売：12月6日）

◆ サイエンス　－山口大学農学部藤田志歩助手－
メスがオス選ぶ巧妙さ
オスとメス、どちらが主導？
子孫を残す仕組み　オス競争と別に
（日経：12日）

◆ 企業との連携深めたい
21日の周南皮切りに　山大が各地で懇談会
（毎日：15日）

◆ 周東総合病院小児科存続
山大医学部に知事が協力要請
（読売：18日）

◆ 山口大美術部があすまで作品展　－市民会館で－
（山口：18日）

◆ 科学の美、写真で紹介　山口大学理学部主催－
山大サイエンスワールド 岩国、厚狭高も出展
（山口：19日）

◆ 08年春卒業生に地元企業を紹介
山大、25日フォーラム
（山口：22日、山口・読売：26日）

◆ 地域で育もう！地域で助けよう！子どもの未来 特集
－教育学部教授堂野佐俊さんに聞く－
家庭、学校、地域一丸となって問題の解決を
子どもたちは孤立化した社会で悩んでいます。
（読売：25日）

◆ 来春、保健学博士課程を新設
－山大大学院医学研究科－
救急や遺伝子分野など充実
定員5人　社会人にも門戸
（宇部日報：28日、朝日：29日）

◆ 美しい音色で聴衆を魅了
山口大医・工学部管弦楽団定演
（宇部日報：28日）

◆ 障害児のためのおもちゃ
山大工学部生が開発
光センサーなど搭載　スイッチ類を一工夫
触れるだけで作動可能
（宇部日報：29日、朝日：12月12日）

◆ 来年度から　看護師を大幅増員
－山大付属病院－
安全で質の高いサービス提供へ
配置基準「7対1」に　（宇部日報：29日）

◆ 中国四国学生駅伝50年　たすきをつなぐ
「西の箱根」へ6校集う
山口大生が発案夢実現
（中国：29日、12月3・4日）

◆ 山口大大学院・技術経営研究科
北九州教室本格始動へ
来年4月　主に社会人対象に　（毎日：29日）

◆ 山口大ＥＳＳ（英語会話研究会）英語劇公演
「Ｉ　ＡＭ　ＳＡＭ」　（毎日：30日）

12月

◆ 北九州市 環境保護 雲南省
山 口 大 人材育成 貴州省
自治体間でソフト協力
対中円借款 新モデルに　（西日本：5日）

◆ 顔　白色発光ダイオード照明を開発
田口 常正さん（大学院研究特任教授）
「仕事も趣味も、研究」　（読売：12日）

◆ サンデー ひと 舞台
防災おじさん揺るがぬ信念
山大大学院教授山本 哲朗さん
「対処法子どものときから」
（読売：17日）

◆ 山口大文化会演劇部冬公演「眠りの切り札」
（毎日：14日、読売：21日）

◆ 技術経営研究科上西科長を再任
－山口大大学院－　（中国：19日）

◆ アングル 参加者増え事業化に弾み
－山口大生が視察－
周南地域4商議所産業観光2年
動物園加え親しさ工夫　（中国：20日）

◆ 山大教育学部長吉田氏を再選、人文学部長添田氏を選出　（山口：22日）

◆ 赤米もちふっくら　－山大農場－
埋蔵文化財資料館と教育学部の主催
（山口：24日、読売：25日）

◆ 山大病院も指定　－がん診療拠点空白県解消－
（山口・日経：28日）

◆ ボランティアで防災授業をしている山本 哲朗・山口大大学院教授
模型使い災害の怖さ再現
「助け合い」の心も強調　（朝日：30日）

'07 1月

◆ 地域発展へ最大限努力
山口大学長　丸本 卓哉　（山口：3日）
◆ 焦点 '07やまぐち　新春インタビュー
改正教基法　佐々木司・山口大教育学部助教授
横柄な個人主義抑制
学校・地域・家庭の連携加速　（山口：5日）
◆ 学部長2人を内定
・人文学部長に添田建治郎教授を選出
・吉田一成教育学部長を再選　（中国：10日）
◆ 山大理学部長増山氏が再選　（山口・中国：11日）
◆ 微細気泡　医療や浴槽で活用
－山口大工学部の研究者、学生他－
宇部で　新製品など発表会　（山口：16日）
◆ 家畜病院 から 動物医療センター へ
山口大改称「家族の一員」ペット飼い主に配慮
（読売：17日）
◆「心」の問題、時間で解く
山口大研究所が学術講演会
（宇部日報：17日）
◆ 防災まちづくり大賞　－県内初－
防府の支援団体　消防庁長官賞に
瀧本浩一議長（山口大地域共同開発センター助教授）　（読売：18日）
◆ 教訓風化させない
阪神大震災12年
「命・財産自分で守る」
山大工学部長三浦房紀教授　防災の基本強調
（朝日：18日）
◆ センター試験準備はＯＫ？
今日から5707人挑む（山口・読売・中国：20日）
◆ ドイツ出身の山大非常勤講師が講演
公開講座に100人
－山口大非常勤講師アンゲリカ・エムデさん－
（山口：21日）
◆ 学びのフィールドは夢限大　山口大学
－入試課－　（読売：22日）
◆ 夢に向け第一歩
センター試験　県内5707人が挑む
（朝日・日経・西日本・山口・毎日・読売：21日、読売：22日）
◆ 小谷科長を再任　―山大東アジア研究科－
（山口：25日）
◆ 団塊の社会参加強化を
－パネリスト丸本 卓哉山口大学長他－
山口経済同友会　知事らを招き討論会
（山口：24日、毎日：25日、雄飛：2月1日）
◆「マクベス」を独自に演出
教育学部3年谷 竜一さんが挑戦
（サンデー山口：24日）
◆ やまぐち学フォーラム開催
－教育学部やまぐち学研究会－
酒文化を語り合う
（サンデー山口：24日、西日本・ほっぷ：26日、毎日・山口：28日）
◆ ７活断層 順番に活動
山口中部の大原湖断層系
北東から南西へ　山口大調査、警戒呼びかけ
山口大断層テクトニクス研究グループ代表
金折裕司・山口大大学院教授　（読売：25日）
◆ 山口大病院長に松崎教授を再選
（毎日・山口：26日）
◆ 愉快な日本語講座
－山口大学人文学部教授・添田建治郎－
山口大学は「口大」なの？
三つの「山大」混同避ける　（中国：27日）
◆ 30歳代 若者語は〝うざい〟？
山口大生が調査　－人文学部日本語文化論コース4年柳田由香里さん－
「知ってるけど使わない」急増（読売：29日）
◆ 大声援つなぐ心
山口大ク伊藤選手　難病克服力出し切る
（中国：29日）
◆ 山大生が卒論発表会
－人文学部日本語文化論コース－
１日午後1時から　一般対象に　（読売：30日）
◆ 経営研究討論形式で　－経営者ら協力－
山大大学院、テレビ会議システム活用
（山口：30日）

「デジタル山口大学」放映のお知らせ

山口大学の大学活動を紹介する番組として、山口ケーブルビジョン（株）の12chで毎月１日から15日15：30～15：45に放映しています。サービスエリアは山口市、防府市、宇部市、美東町です（平成19年２月現在、一部地域を除く）。

放送中の番組及び過去に放送した番組は、山口大学Webページでもご覧いただけます。

【URL】http://ds21. cc. yamaguchi-u. ac. jp/~www-yu/digiyama/index/

○４・５月の番組予定

「青春維新」～シニアが取り組む生涯学習～	［４月１日（日）～15日（日）］
「新型白色LED照明に世界で初めて成功!!」	［５月１日（火）～15日（火）］

○ご意見・ご感想をお寄せ下さい
【E-mail】sh011@yamaguchi-u. ac. jp

編集後記

記録的な暖冬が続き、（この文章を書いているのは２月初めですが）梅の花ももう咲き始めています。私事ですが、天候よりも、入試などの大学行事で季節の移り変わりを確認しているこのごろです。もうすぐ新しい年度がやってきます。

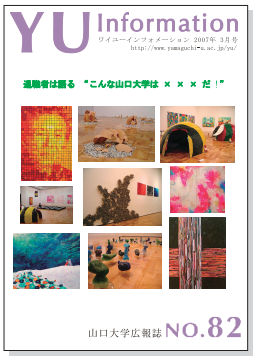
年度末にあたり、本号の特集テーマは「退職者は語る“こんな山口大学は×××だ！”」とし、退職される教職員になるべく辛口な内容で執筆していただくこととしました。このテーマ決定に至るまで、ご想像の通り、会議段階から様々な意見が出されました。多くの執筆者のご理解を頂きまして、十分辛口の文章、かつ、大学の将来に対する愛情のこもった建設的なご意見を集めることができました。大変感謝しております。

大学内外の環境は激変し、さらにまだ変化しつつあります。今や「大学は如何にあるべきか」、果ては「山口大学のあり方」自体が問われる時代です。僭越ではありますが、退職者の方々の厳しいご意見ご提言を呼び水とさせていただきまして、大学内外の本誌読者の方々から、山口大学に対する様々なご意見を頂戴いただければ、これ以上の幸せはございません。

（白石　清）

◎山口大学 Web ページ http://www.yamaguchi-u.ac.jp/

表　紙　説　明



教育学部美術教育選修の平成18年度の卒業制作展です。本年度は３年ぶりに山口県立美術館で開催することが出来ました。学生８人による絵画、デザイン、写真、彫刻、立体、木工、陶芸など幅広い美術表現を行いました。

また、修士課程では学生１人による論文を発表しました。美術や美術教育のための発想豊かで多様な表現を目指しています。

表紙デザイン
人文学部　教授　坪郷　英彦